

近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ～ 亀山西 JCT）建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ



2015（平成27）年10月

三重県埋蔵文化財センター



伊坂城跡（北西から）



北山城跡・居林遺跡 弥生時代後期の竪穴住居（東から）

例 言

- 1 本書は、平成26年度に実施した近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。
- 3 調査は、下記の体制で実施した。

委託者 中日本高速道路株式会社
 受託者 三重県
 調査主体 三重県教育委員会
 調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究3課（四日市駐在）
 課長 森川常厚
 主幹 服部芳人（課長代理）・河尻浩一・松永公喜・浅野隆司・溝田 靖
 主査 鈴木規之・宮崎久美・中村法道・水橋公恵・山中由紀子・水谷 豊・山田 猛
 主事 矢田 陽・西脇智広
 技師 高松雅文・相場さやか・宮原佑治

- 4 調査面積・期間等は下表による。

遺跡名(調査次)	調査面積 m ²	調査期間	担当者	作業受託
伊坂城跡（第6次）	7,875 (下層319 含)	H26. 5. 19～H27. 3. 13	松永・浅野・ 高松・西脇	㈱アート
伊坂城跡（第7次）	2,134 (下層94 含)	H26. 8. 20～H27. 3. 13	河尻・水谷	橋本技術㈱
北山C遺跡（第5次）	9,047	H26. 4. 18～H26. 9. 29	鈴木・山中・ 水橋・矢田	大成エンジニアリング㈱
北山A遺跡（第6次）	756	H26. 6. 23～H26. 8. 6	中村・宮崎・ 山田	㈱アーキジオ三重
中野山遺跡（第13次）	6,173	H26. 4. 18～H26. 11. 25	中村・宮崎・ 山田	㈱アーキジオ三重
北山城跡・居林遺跡（第4次）	6,948	H26. 4. 18～H26. 12. 18	相場・宮原	㈱四門
小牧南遺跡（一次）	165	H26. 12. 8～H26. 12. 9	矢田・水橋	(ネクスコ労務提供)
棕ノ木遺跡（一次）	174	H26. 6. 18～H. 26. 6. 19	服部	(ネクスコ労務提供)
棕ノ木遺跡（一次）	186	H27. 3. 10～H27. 3. 11	鈴木・矢田	(ネクスコ労務提供)
棕ノ木遺跡（第2次）	791	H26. 10. 16～H27. 1. 13	山中・鈴木	西部緑化(有)
高ノ瀬遺跡（一次）	54	H26. 4. 09	服部・矢田	(ネクスコ労務提供)
高ノ瀬遺跡（一次）	715	H26. 10. 1～H26. 10. 24	水橋・矢田	(ネクスコ労務提供)
小社遺跡（第3次）	2,073	H26. 4. 18～H26. 8. 12	河尻・水谷	橋本技術㈱

- 5 発掘調査及び本書の作成に際しては、千田嘉博先生にご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。
- 6 本書で示す方位はすべて座標北で示している。なお、これまでの調査の経緯から、伊坂城跡は日本測地系、その他の遺跡は世界測地系を用いている。
- 7 本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。
 SH：竪穴住居 SB：掘立柱建物、礎石建物、門 SD：溝、堀切、堀底道、古墳周溝、古墳
 SE：井戸 SK：土坑、古墳主体部、土壇墓、木棺墓 SX：中世墓
 SZ：石つぶて、階段状遺構、貝殻

本文目次

- 1 前言…………… (服部) (1)
- 2 伊坂城跡 (第6次) …… (浅野・高松・松永・西脇) (7)
- 3 伊坂城跡 (第7次) …… (水谷) (17)
- 4 北山C遺跡 (第5次) …… (矢田) (21)
- 5 北山A遺跡 (第6次) …… (宮崎) (25)
- 6 中野山遺跡 (第13次) …… (中村) (28)
- 7 北山城跡・居林遺跡 (第4次) …… (相場・宮原) (33)
- 8 小牧南遺跡 (一次) …… (矢田) (39)
- 9 棕ノ木遺跡 (一次) …… (服部・鈴木) (40)
- 10 棕ノ木遺跡 (第2次) …… (鈴木) (41)
- 11 高ノ瀬遺跡 (一次) …… (矢田) (43)
- 12 小社遺跡 (第3次) …… (河尻) (44)

写真目次

表紙	伊坂城跡遠景	写真30	調査区全景	23
巻頭図版 1	伊坂城跡全景	写真31	S K185出土砥石類	24
	北山城跡・居林遺跡（第4次）	写真32	S K185出土白玉	24
	弥生時代後期の竪穴住居	写真33	S K159出土砥石	24
1 前言		5 北山A遺跡（第6次）		
写真1	中野山遺跡現地説明会	写真34	北山A遺跡遠景	25
写真2	伊坂城跡現地説明会	写真35	S H401・S H302・S K402	26
写真3	桑名市七和公民館 出前講座	写真36	S H302出土の砥石	26
写真4	伊坂城跡礎石移設 現在の様子	6 中野山遺跡（第13次）		
2 伊坂城跡（第6次）		写真37	S K1827	28
写真5	北からみた伊坂城全景	写真38	S K1838	28
写真6	西からみた曲輪1全景	写真39	調査区全景	28
写真7	櫓門S B715	写真40	S H1820	29
写真8	東からみた石つぶて（S Z714）	写真41	S H1820出土土師器甗	29
写真9	西からみた曲輪2全景	写真42	S B1812	29
写真10	曲輪2門（S B907）	写真43	S B1817	29
写真11	堀底道（S D719）	写真44	S K1811	31
写真12	階段状の遺構（S Z908）	写真45	S K1828	31
写真13	曲輪4 S Z928の出土状況	写真46	石鏃（上）切目石錘（下）	32
写真14	出土遺物	写真47	須恵器杯・蓋	32
写真15	北からみた曲輪13～16と切岸	写真48	須恵器甕（S H1813出土）	32
写真16	上空からみた伊坂城	7 北山城跡・居林遺跡（第4次）		
3 伊坂城跡（第7次）		写真49	調査区全景	33
写真17	調査区遠景	写真50	S H482・484・488周辺	34
写真18	西区 S B1025	写真51	S H402以西の竪穴住居群	34
写真19	西区 曲輪B犬走り状遺構	写真52	S H465・469・470周辺竪穴住居群	34
写真20	中区 S K1011土層	写真53	S H445	35
写真21	東区全景	写真54	S H459	35
4 北山C遺跡（第5次）		写真55	S H463	35
写真22	S D88, S K202	写真56	S H445主柱穴遺物出土状況	35
写真23	S D176土師器鉢出土状況	写真57	S H402・408・428	36
写真24	S D177土橋状遺構、土師器甕	写真58	S H449・450	36
写真25	S D195円筒埴輪出土状況	写真59	S H462・464	36
写真26	S K152	写真60	S H449主柱穴土層	36
写真27	S K185砥石・勾玉出土状況	写真61	S B409	37
写真28	S K200	写真62	S B420	37
写真29	S K182	写真63	出土土器	38
		写真64	出土石器	38

8 小牧南遺跡（一次）	
写真65 T 5全景	39
9 棕ノ木遺跡（一次）	
写真66 T 3	40
写真67 T 8	40
10 棕ノ木遺跡（第2次）	
写真68 調査区全景	41
写真69 SH1	41
写真70 SH19	42

写真71 SH10カマド	42
11 高ノ瀬遺跡（一次）	
写真72 T25全景	43
12 小社遺跡（第3次）	
写真73 A地区SD32	45
写真74 B地区SX53	45
写真75 B地区SK83	45
写真76 調査区全景	45

挿 図 目 次

1 前言	
図1 遺跡位置図	3
図2 伊坂城跡調査区位置図	4
図3 北山C遺跡調査区位置図	4
図4 四日市北JCT付近調査区位置図	4
図5 棕ノ木遺跡調査区位置図	5
図6 小社遺跡調査区位置図	5
2 伊坂城跡（第6次）	
図7 遺構平面図	9
3 伊坂城跡（第7次）	
図8 調査区位置図	18
図9 遺構平面図	19
4 北山C遺跡（第5次）	
図10 遺構配置図	24
5 北山A遺跡（第6次）	
図11 遺物実測図	26

図12 遺構平面図	27
6 中野山遺跡（第13次）	
図13 遺構平面図	30
図14 出土土器実測図	32
7 北山城跡・居林遺跡（第4次）	
図15 調査区平面図	34
8 小牧南遺跡（一次）	
図16 調査坑配置図	39
9 棕ノ木遺跡（一次）	
図17 調査坑配置図	40
10 棕ノ木遺跡（第2次）	
図18 遺構配置図	42
11 高ノ瀬遺跡（一次）	
図19 調査坑配置図	43
12 小社遺跡（第3次）	
図20 遺構平面図	44

表 目 次

1 前言	
表1 近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表	2
表2 普及公開活動一覧	4
6 中野山遺跡（第13次）	
表3 古墳時代後期から飛鳥時代の堅穴住居一覧	31

表4 古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物一覧	31
7 北山城跡・居林遺跡（第4次）	
表5 弥生時代後期の堅穴住居一覧	35
表6 古墳時代前期初頭の堅穴住居一覧	37

I 前 言

1. はじめに

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路）の四日市 JCT～亀山西 JCT にかかる埋蔵文化財発掘調査を、平成 20 年度から実施している。

平成 20 年度から平成 25 年度に実施した発掘調査の概要は、発掘調査概報Ⅰ^①、Ⅱ^②、Ⅲ^③、および同Ⅳ^④として、また、平成 20 年度に発掘調査を実施した伊坂窯跡と、平成 21 年度に発掘調査を実施した伊坂遺跡第 3 次・伊坂城跡第 5 次調査の結果については、発掘調査報告^⑤を刊行し、公表している。その中に当該遺跡の発掘調査成果はさることながら、新名神高速道路事業の概要や発掘調査に至る経緯、保護措置などについても記載しているため、参照されたい。

2. 平成 26 年度の調査

(1) 現地調査

今年度も、昨年度と一昨年度に引き続き、年間約 5 万㎡に近い広大な発掘調査面積に対応するため、当埋蔵文化財センター職員全体の約 1/3 を四日市整理所に駐在させ、当事業に対処した。

年度当初の計画としては、伊坂城跡、北山 C 遺跡、北山 A 遺跡、中野山遺跡、北山城跡、椋ノ木遺跡、小社遺跡の 7 遺跡の二次調査を計 41,645 ㎡、小牧南遺跡、椋ノ木遺跡、高ノ瀬遺跡の 3 遺跡の一次調査を計 1,360 ㎡、合計 43,005 ㎡の発掘調査面積が予定された。

年度内には、今年度も用地問題等の進捗を踏まえて、発掘調査計画を確認・共有化する定例会を 4 回、中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所と行った。

また、今年度は特に、四日市北 JCT 建設予定地内などで、道路建設工事が急ピッチで行われており、中野山遺跡や北山城跡は、隣接した場所での発掘調査となった。そのため、より具体的な工事工程と発掘調査工程との調整が必要となり、適宜、発掘調査現場や四日市工事事務所などで調整協議も行った。

昨年度同様、平成 27 年度末に供用開始を予定して

いる四日市 JCT～四日市北 JCT 間に所在する遺跡の発掘調査の優先度が高くなった。特に伊坂城跡については、年度初めによりやく伐採が完了したにもかかわらず、年度内での終了を依頼されるという限られた時間の中での発掘調査となった。しかも、1 万㎡を超えるという広大な発掘面積であり、高低差は 20 m 以上もあるという非常に厳しい条件での城跡の発掘調査に対して、班体制を増やし、且つ、通常は年末までの調査期間を翌年 2 月まで延長した結果、何とか月末には現地引渡しを行うことが出来た。

その他、北山 C 遺跡では、9 千㎡を超える調査面積を年度の前半に終了するため、班体制を増やし、また、北山 A 遺跡や、伊坂城跡（第 7 次東区）では、先行して発掘調査を完了させ、部分的な現地引渡しなども行った。

結果的には、二次調査は計 35,797 ㎡、一次調査は計 1,294 ㎡、合計 37,091 ㎡の発掘調査を行った。

(2) 室内調査

今年度も現地調査に重点をおいたため、室内調査においては出土遺物の洗浄・注記等の一次整理及び遺物実測等の二次整理作業を行ったに止まる。その中で、昨年度調査を実施した発掘調査概報の作成を実施した。

3. その他

調査の概要については、報道機関などへ資料提供を行うとともに、現地説明会を 7 月 13 日に小社遺跡で、8 月 31 日に北山 C 遺跡で、10 月 5 日に中野山遺跡と北山城跡で、11 月 23 日に伊坂城跡で、12 月 14 日に椋ノ木遺跡で実施した。特に、伊坂城跡については、各種団体などから多くの見学依頼の問い合わせがあり、可能な限り対応した。また、地元団体や高等学校への出前講座も行った。

さらに、伊坂城跡の曲輪 1 で確認した礎石については、地元の八郷地区自治会から移設の要望があり、関係機関が協議を行い、伊坂貯水池の外周道路脇への移設に協力をした。

[註]

- ① 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』2010
- ② 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012
- ③ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013
- ④ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014
- ⑤ 三重県埋蔵文化財センター『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』2011・三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡（第3次）発掘調査報告』2012

No	遺跡名	所在地	事業地内遺跡面積 (㎡)	一次調査後施工可面積 (㎡)	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	遺跡別調査合計面積 (㎡)	未調査面積 (㎡)	備考	
					一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査	一次調査 二次調査				
1	伊坂遺跡・伊坂窯跡	四日市市伊坂町	3,950	0	42 800	3,150						42 3,950	0	調査終了	
2	伊坂城跡	四日市市伊坂町	25,000	0		6,000	2,500			4,100	10,009	25,000	0	調査終了	
3	北山C遺跡	四日市市西大鐘町 桑名市大字志知	22,000	4,000				600		1,000 4,350	9,047	1,600 22,000	6,900	路線内調査終了・ 路線外工事計画あり	
4	野中遺跡	四日市市北山町	15,500	15,500					500	500		0	0	調査終了	
5	黒土遺跡	四日市市北山町	11,000	11,000			580	380				960	0	調査終了	
6	北山A遺跡	四日市市北山町	19,000	5,300			950 100	500 3,760	4,130	4,920	756	1,450 13,700	0	調査終了	
7	中野山遺跡	四日市市北山町	43,000	0			1,530	880	6,400	10,712	17,833	6,173	43,000	0	調査終了
8	筆ヶ崎古墳群	四日市市小牧町	15,000	0				560 750	9,100	5,319		560 15,000	0	調査終了	
9	北山城跡・居林遺跡	四日市市北山町	20,000	2,500				630	6,426	6,438	6,948	630 17,500	0	調査終了	
10	居林古墳群	四日市市北山町	—	—								0	—	北山城跡対象範囲に含まれる。	
11	小牧南遺跡	四日市市小牧町	20,300	6,459				460	800	72	165	1,497 7,536	6,305		
12	中野平古遺跡	四日市市中野町	7,000	7,000						940		940	0	調査終了	
13	野添御飯山古墳	菟野町川北	1,000	1,000					200			200	0	調査終了	
14	棕ノ木遺跡	菟野町池底	16,500	15,709						930	360	1,290 791	0	調査終了	
15	大久保遺跡	菟野町潤田	12,000	12,000						800		800	0	調査終了	
16	鈴山遺跡	菟野町音羽	8,000	1,500						980		980	9,000	新調整池計画あり	
17	大松遺跡	鈴鹿市大久保町	2,200	2,200					180			180	0	調査終了	
18	高ノ瀬遺跡	鈴鹿市山本町	33,600	17,200					1,580		769	2,349 0	10,238	鈴鹿スマートIC計画あり	
19	折子遺跡	鈴鹿市山本町	13,500	13,500					800			800	5,700	路線内調査終了・ 鈴鹿スマートIC計画あり	
20	東荒野遺跡	鈴鹿市山本町	4,900	4,900					500			500	0	調査終了	
21	小社遺跡	鈴鹿市小社町	12,000	8,025				1,020	400		2,073	1,420 3,646	329		
22	釜垣内遺跡	鈴鹿市小岐須町	30,000	14,700				2,300	200			2,500 11,700	3,600		
年度別調査合計面積 (㎡)			335,450	142,493	42 800	0 9,150	3,060 2,600	7,330 10,910	5,160 44,956	5,222 54,126	1,294 35,797	21,108 163,823	42,072	H27.3.31現在	

表1 近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表

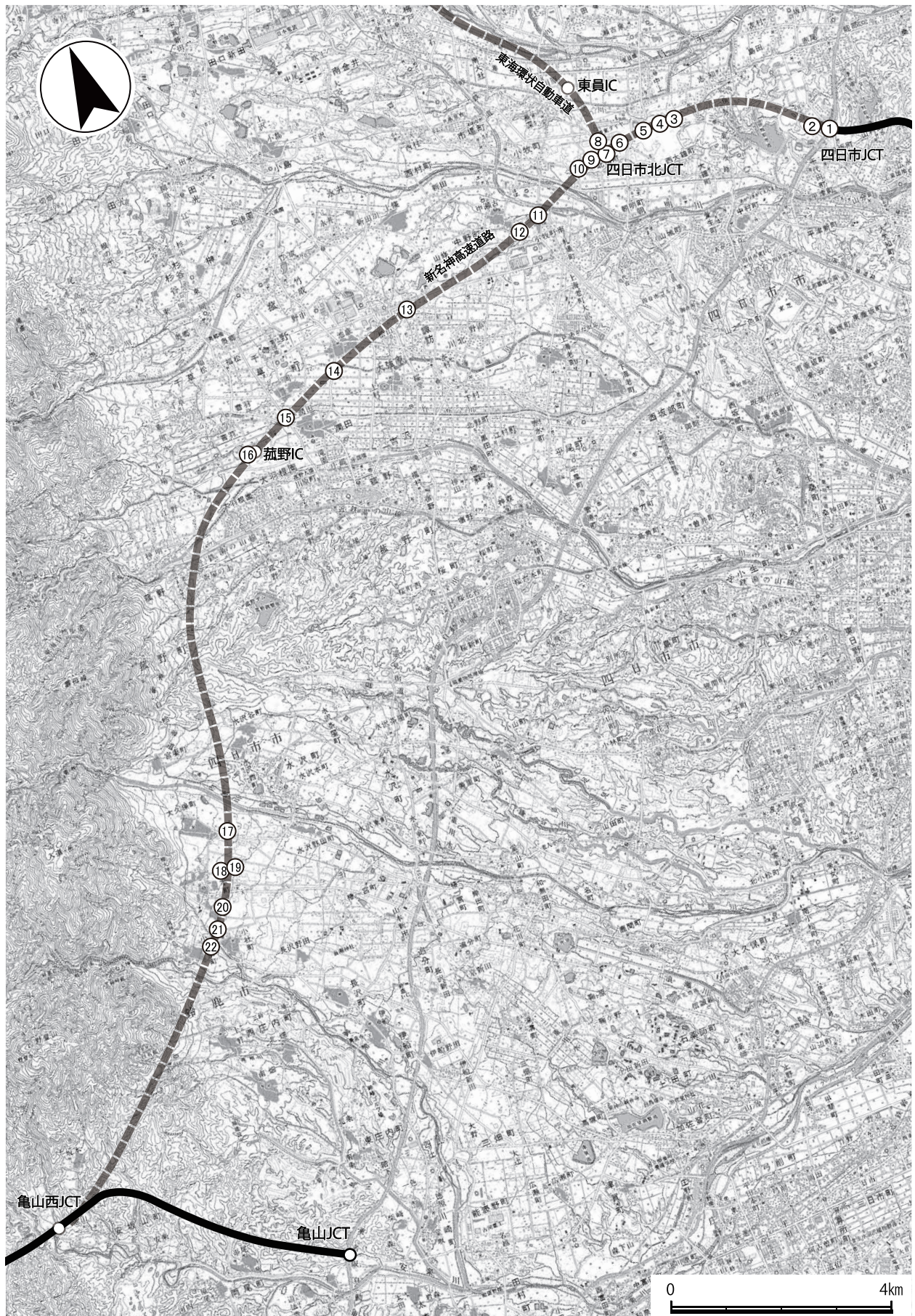


図 1 遺跡位置図 (1 : 100,000)

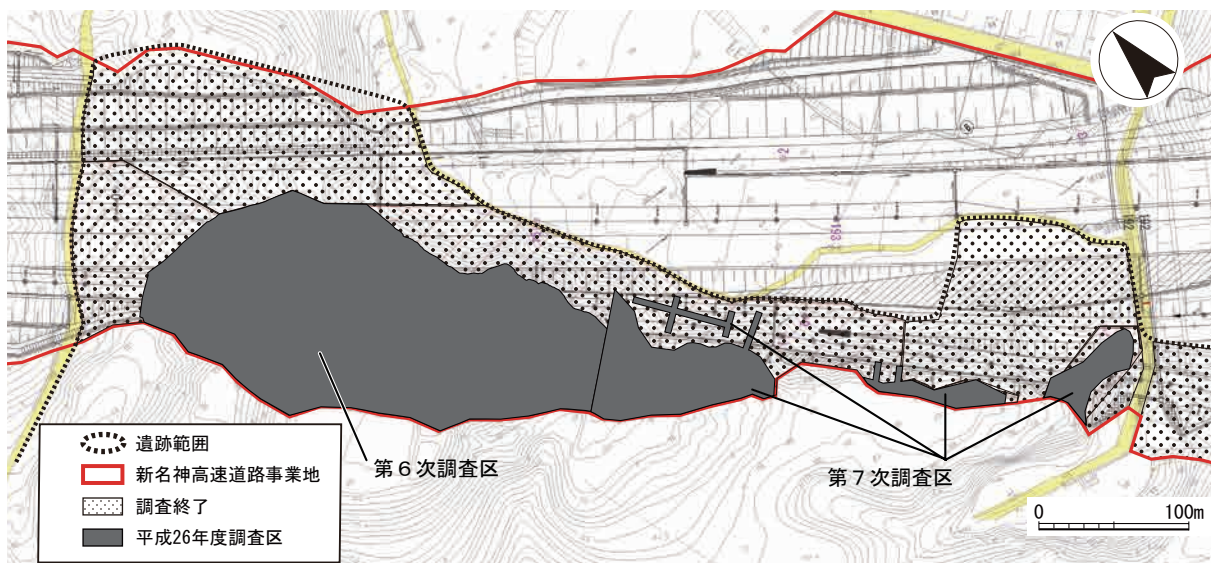


図2 伊坂城跡調査区位置図 (1 : 5,000)

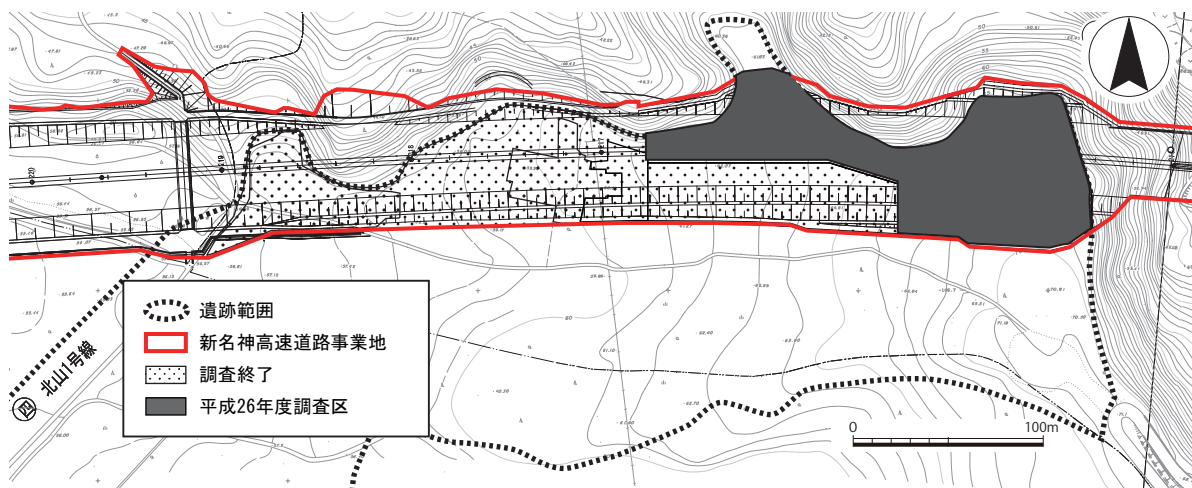


図3 北山C遺跡調査区位置図 (1 : 4,000)

内容	所在地・会場	開催年月日	参加人数	備考
八郷の歴史探検隊 出前講座	八郷地区市民センター	平成26(2014)年6月23日(月)	15名	
小社遺跡(第3次) 地元説明会	鈴鹿市小社町	平成26(2014)年7月13日(日)	44名	
北山C遺跡(第5次) 現地説明会	桑名市志知	平成26(2014)年8月31日(日)	179名	
中野山遺跡(第13次)、北山城跡・居林遺跡 (第4次)現地説明会	四日市市北山町	平成26(2014)年10月5日(日)	92名	
桑名市 七和公民館 出前講座	七和公民館	平成26(2014)年10月24日(金)	15名	
八郷の歴史探検隊 出前講座	八郷地区市民センター	平成26(2014)年10月31日(金)	25名	
伊坂城跡(第6次・第7次) 現地説明会	四日市市伊坂町	平成26(2014)年11月23日(日)	457名	
椋ノ木遺跡(第2次) 現地説明会	三重郡菟野町池底	平成26(2014)年12月14日(日)	124名	
北星高校 出前講座	北星高校	平成27(2015)年1月18日(日)・ 22日(木)	22名	1月18日:12名 1月22日:10名

表2 普及公開活動一覧

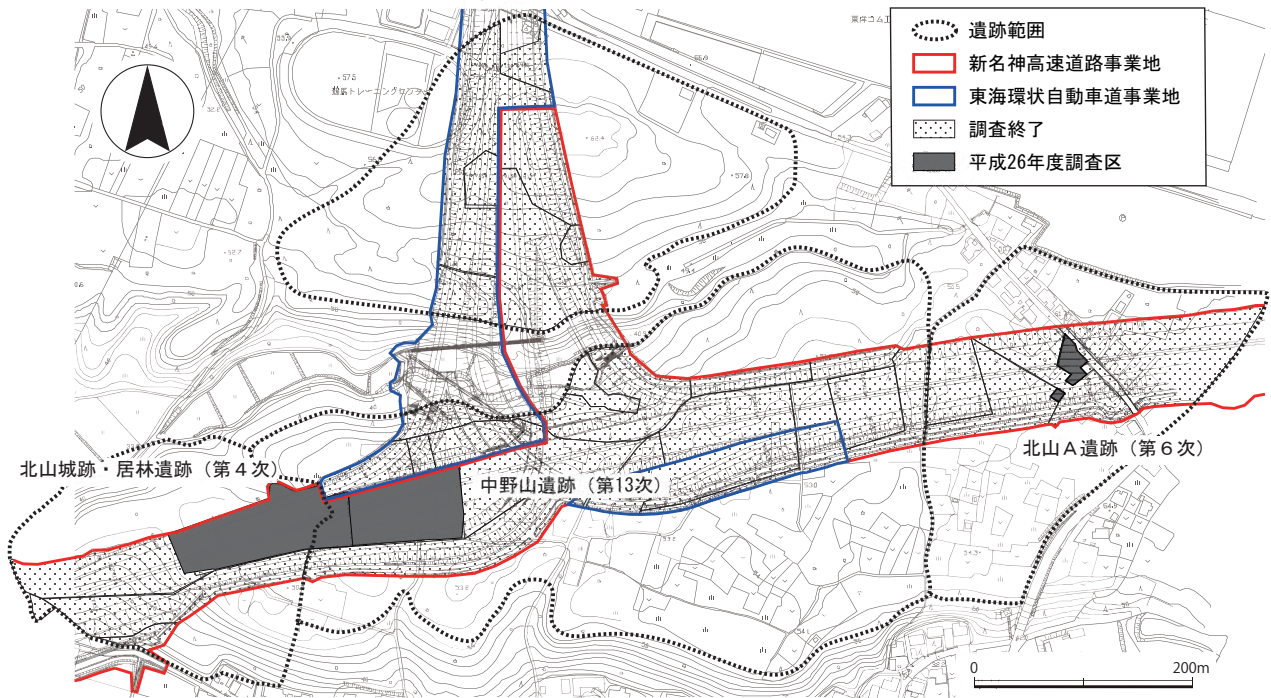


図4 四日市北 JCT 付近調査区位置図 (1 : 7,000)

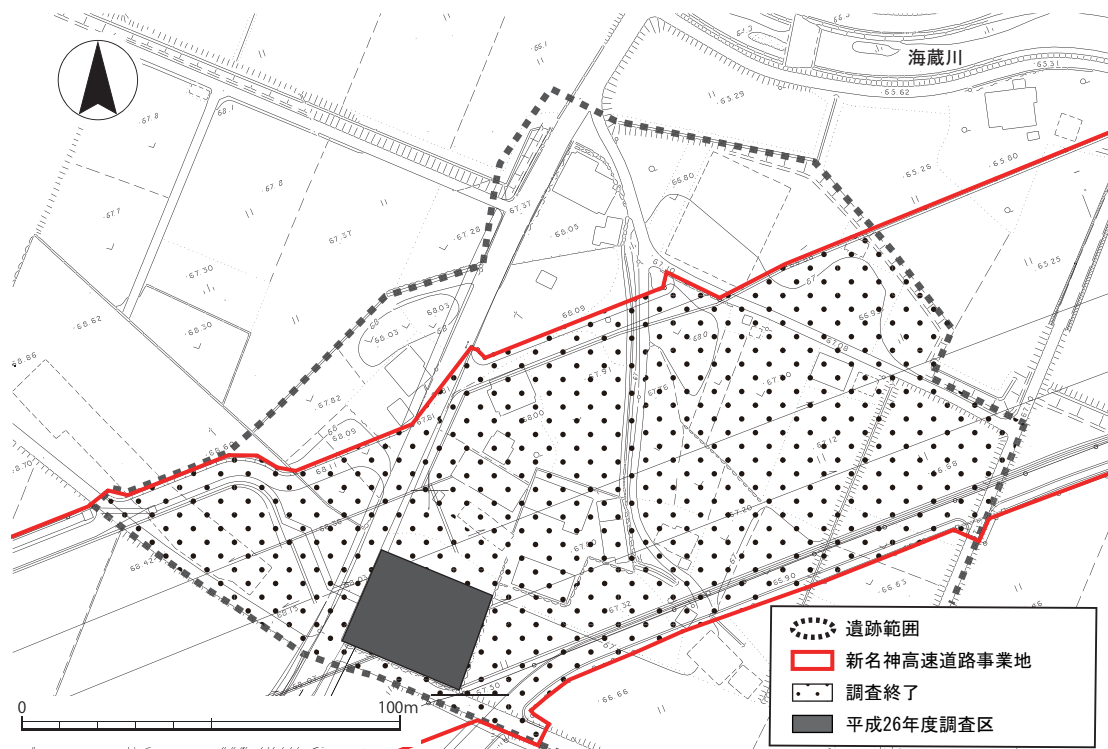


図5 椋ノ木遺跡調査区位置図 (1 : 2,000)

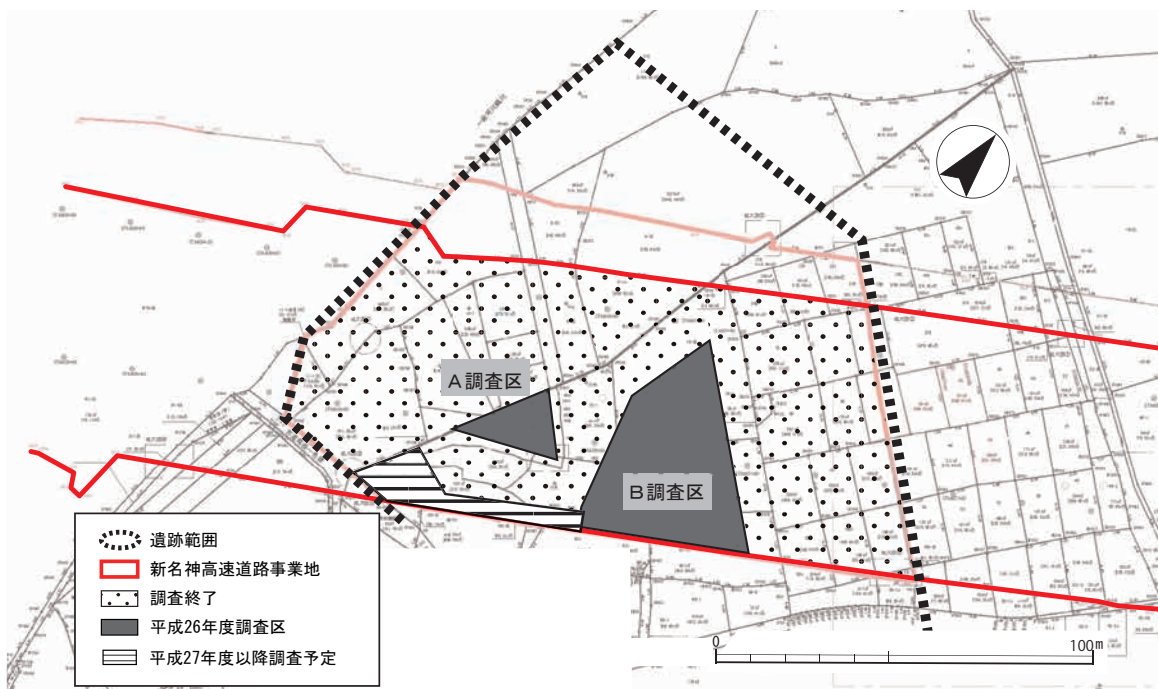


図6 小社遺跡調査区位置図 (1 : 2,000)



写真1 中野山遺跡現地説明会



写真2 伊坂城跡現地説明会



写真3 桑名市七和公民館 出前講座



写真4 伊坂城跡礎石移設 現在の様子

2 伊坂城跡（第6次）

1. はじめに

伊坂城跡は、四日市市伊坂町に所在する戦国時代の城館跡である。城は朝明川と員弁川にはさまれた朝日丘陵を利用しており、その地形と平野部との比高差をうまく配慮した選地といえる。周辺には西之広城跡のほか、萱生城跡・大矢知城跡・市場城跡などの中世城館跡がある。

伊坂城跡の遺跡範囲は東西約650m、南北約130mで、標高84mを最高点とする曲輪1とその東にある曲輪2を中心にして、いくつもの平坦地が階段状に東方向へ連なる。さらにその東に丘陵平坦面をうまく利用した東西300m以上、南北約130mの平坦地が広がる。

伊坂城跡では平成11～25年度に第1～5次調査を実施しており、合計19,418㎡の範囲について発掘調査を行った^①。これまでの調査は、東半の広大な平坦地を中心に行っており、戦国時代の道路状遺

構・溝や段状の地形で区画された屋敷地とそれに伴う建物などを確認した。

本年度は第6次調査と第7次調査を実施しており、第6次調査は本丸に相当する曲輪1の北半分と二の丸に相当する曲輪2、およびその北側に広がる平坦地を対象としている。その面積は7,875㎡で、調査期間は平成26年5月19日～平成27年3月13日である。

これまでの調査が麓の屋敷地を中心としているのに対して、第6次調査は城館の主要部を対象とする。調査の結果、曲輪1～16のほか、斜面を人工的に削り落として防御性を高める切岸、堀切2条、掘立柱建物4棟以上、井戸1基などが確認できた。特に曲輪1において櫓門1棟、床面積100㎡に迫る掘立柱建物1棟、曲輪2で門と考えられる遺構1基とカマドの可能性をもつ土坑1基、曲輪3で石つぶて遺構などを確認できた点が大きな成果といえる。

（浅野）



写真5 北からみた伊坂城全景

2. 曲輪1

曲輪1は、伊坂城の最も高い位置を占める曲輪で、いわゆる本丸に相当する。曲輪1は一辺約50mの方形を呈しており、周囲を幅6m、高さ約2mの土塁で囲まれている。発掘調査は、曲輪1の北半分を対象とした。曲輪1への入口は東辺に取り付き、堀底道SD719から入る構造となっている。この入口(虎口)には礎石を伴う門SB715を構えていたことが調査で明らかになった。

曲輪1の内部は段によって大きく二分されている。虎口から下の段に入り、下の段を経て上の段に上がる構造をとる。下の段は調査範囲が限られたため、建物の検出には至らなかった。上の段では掘立柱建物3棟以上、井戸1基などが確認できた。

(1) 掘立柱建物

SB725 掘立柱建物のうち、SB725は南東-北西方向に主軸をとる7間×2間の建物である。桁行は14.3m、梁行は東側で7m、西側で6.5mとなっており、わずかに台形状を呈する。柱間寸法は桁行約2m、梁行3.2~3.5mとなる。柱穴は直径80cm前後、深さ80cm程度と大きいことから、主に側柱によって

上部の荷重を支えていたと考えられる。なお、建物の内側には小穴がいくつか認められることから、床束を据えた可能性がある。SB725の床面積は96㎡であり、第6・7次調査で見つかった建物のなかで規模が最も大きい。位置や規模などから、中心的な建物と評価できる。

なお、SB725の南東隅には東西3.4m、南北2.6m、深さ20cmの隅丸方形の土坑(SK717)がある。この土坑は南東隅土坑の一種の可能性がある。この場合、SB725の土間あるいは玄関に相当することになる。

SB724 南西-北東方向に主軸をとり、5間×1間の建物である。桁行9.3m、梁行3.8mで、梁行の柱間寸法が長いため、間に床束を設けた可能性がある。周囲に多数の柱穴が認められるため、SB724は幾度か建て替えが行われたことがわかる。前述のSB725と直交する主軸をとることから、関連性がうかがえる。

SB726 南西-北東方向に主軸をもつ建物で、南半は調査区外へと続く。その規模は桁行2間以上、梁行3間で、柱間寸法は桁行3m、梁行1.9mとなる。柱穴は直径40~50cm、深さ60cm程度である。SB



写真6 西からみた曲輪1全景



图 7 遺構平面図 (1 : 800)



写真7 櫓門SB 715

725 が中心的な建物とすれば、SB 726 は城主が普段生活していた建物に関連する可能性がある。

(2) 櫓門 (SB 715)

SB 715 は礎石を用いた門で、間口1間、奥行2間、柱間寸法は間口3.2m、奥行1.9mである。主要な柱を据える礎石6石には長辺80cm前後の大きな板石が用いられている。さらに前列・中列の4石には、添え柱を据えた小さな礎石がそれぞれ配される。その大きさは長辺40cm程度で、いずれも土塁の裾に接するように配石されている。

SB 715 は、高さ3m以上の土塁に挟まれていること、重量物に耐え得る大きな礎石の存在などから、櫓門に復元できる。櫓門とは1階が門、2階が櫓と

なっている門をさす。大別すると、2階が単独の櫓のものと、2階が廊下のようになっているために土塁と土塁の間を行き来できるものがあり、SB 715 は後者に当てはまる。SB 715 はSD 711・716 よりも後に建てられたことが遺構の重複関係から判明していることから、改築に伴って建てられたと考えられる。この櫓門によって伊坂城の防御性はさらに高まったといえる。

(3) 溝 (SD 706・710)

SD 706・710 ともに幅75cm、深さ5～15cm程度の浅い溝である。これらの溝より南側で建物、北側で土坑・井戸が認められることから、曲輪1を区画する役割を果たしていたといえる。またSB 725 の桁行と軸を揃えていることから、雨落ち溝としても機能していたと考えられる。

(4) 井戸 (SE 707)

上部において一辺3.8mの方形を呈する深さ4mの井戸である。底部において滞水に伴う変色などは明確ではなかったため、豊富な湧水の可能性は低い。溜め井戸のようなものだったと考えられる。埋土に多数の礫が充填されていたことから、改築に伴う地山掘削で生じた礫を投棄したものと推測される。

(5) 土坑 (SK 705)

SK 705 は長径2.8m、短径2.4m、深さ27cmのいびつな円形の土坑である。この土坑から土器とともに多くの二枚貝が出土した。このSK 705 はSD 706 よりも北側に位置していることから、建物が並ばない区画に設けられたと考えられる。

(6) 小穴 (A-Y22Pit 8)

SB 724 と重なるように検出した小穴である。直径100cm、深さ50cmで、小穴とほぼ同じ大きさの常滑製品の甕が収められていた。その特徴から16世紀前半の甕と考えられる^②。なお、甕の中から別の遺物は出土しなかった。(高松)



写真8 東からみた石つぶて (S Z 714)

3. 曲輪3

曲輪3は、曲輪1東側を囲む土塁の一部をさす。ここから礎石建物1棟と集石(石つぶて)遺構が見つかったため、他の土塁と区別するために便宜的に曲輪3と呼称する。その範囲は南北16m、東西8mで、曲輪1との比高差は3m、堀底道SD719との比高差は6mを超える。なお、発掘調査範囲外となるが、曲輪3の南にも平坦地が伸びていることから、これらが一連となって、曲輪1の東側を強固に防御していたと考えられる。

(1) 礎石建物 (S B 713)

礎石建物S B 713は、梁行3間(4.5m)、桁行1間以上(1.6m)で、梁行の柱間寸法は1.9m・0.9m・1.8mと中央で短い。礎石は、7個が残存しており、長辺約25～40cmといずれも小さな平石を用いている。礎石の配置と曲輪3の西側に偏った位置で礎石が確認されたことなどから推測すると、梁行は東側にもう1間延びて、本来3間×2間だった可能性がある。

(2) 石つぶて (S Z 714)

礎石建物の南側において、多数の石がまとまった

遺構を確認した。この集石遺構は、曲輪1へと至る堀底道SD719を見下ろせる位置にあることから、高低差を利用して、眼下の敵に投げつけるための石つぶてと考えられる。

石つぶては、曲輪3の礎石建物の南に7×3mの範囲に広がり、厚さは約30cmである。概ね2層に積み重なっていることから、その数は3,000個と推定される。石の大きさはこぶし大のものが多く、計測すると重さが400～500gのものが最も多かったが、長径20cm、重さ3kgを超えるものもあった。

石つぶての大きさ・形状に類似した礫が地山に多数含まれることから、伊坂城の築城・改修時に生じた礫を石つぶてとして利用したと想定される。

(3) 曲輪3の断ち割り

曲輪3を断ち割った結果、下部は地山削り出し成形、上部は盛土成形であることが判明した。上部の盛土は厚さ約2mで、盛土の中ほどから常滑製品の甕が出土した。中野晴久氏の編年によると、この甕は11型式に相当し、16世紀前半ごろのものと考えられる。伊坂城跡の築城・改修時期を探る手がかりとなるだろう。(松永)



写真9 西からみた曲輪2全景

4. 曲輪2

曲輪2は、曲輪1の東に位置する南北20m、東西19mで、台形状を呈する曲輪である。曲輪2の北側には曲輪4、東側には堀切のSD910が位置する。曲輪2は四方を土塁に囲まれているが、南東隅・北東隅は流出等により失われている。北側・西側の土塁は遺存状態に恵まれ、高さ1m程度、下端幅3m程度を測る。このうち、西側の土塁には中央付近で途切れた部分があり、この地点で門SB907が検出された。これによって、曲輪2の平坦面への経路は、堀底道SD719から曲輪2の西側斜面を登っていたことが判明した。

なお、曲輪2から曲輪1へ直接行く経路は、SA744に限られており、両曲輪の連結が良好ではない。堀底道SD719によって曲輪1と曲輪2が分断されていることが、伊坂城の大きな特徴といえる。

曲輪2の遺構として、門SB907、カマドの可能性をもつSK905などを確認した。また堀底道SD719からSB907へと登る位置で階段状の遺構SZ908を確認した。遺物として中世の土師器・陶器のほか、北側の土塁盛土から貝殻が出土している。

(1) 門 (SB 907)

西側土塁が途切れて虎口状を呈する位置で検出した。SB907は長さ4.5m、幅0.56m、深さ0.37mの溝とその両端で検出した柱穴からなる。柱穴は直径35cm、深さ0.6～0.7m、柱間寸法約3.8mである。これらの状況から、SB907は主柱2本からなる門と考えられる。礎石を用いていない点も、曲輪1の櫓門SB715と大きく異なる特徴といえる。

遺物として溝の西側から、長さ8～9cmの青銅製品が出土した。SB907に伴う金具の可能性が考えられる。

(2) カマド (SK 905)

SK905は、曲輪2のほぼ中央に位置し、長辺3.6m、短辺2.4m、深さ0.35mのいびつな長方形を呈する。土坑の北東隅には焼土・炭・被熱した石材がまとまっていた。こうした状況から、土坑の北側は燃焼部、南側は作業場だったと考えられる。県内における類例として、津市多気北畠氏遺跡上村地区SF2などが知られており、中世のカマドの可能性が指摘されている^⑧。詳細な検討は今後委ねるとして、SK905についてもカマドの可能性をあげておきたい。



写真10 曲輪2門 (S B 907)

(3) 階段状の遺構 (S Z 908)

曲輪2の西側斜面で検出した階段状の遺構で、その範囲は南北約7m、東西約3mの範囲をさす。S Z 908はS D 719のやや南寄りから曲輪2の門S B 907へ斜めに登るように取り付く。S D 719とS B 907の比高差は約4mを測り、正面から登ると急斜面となる。こうした点を配慮して斜めに登る階段状の遺構を築いたのかもしれない。ただし、遺存状態に恵まれなかったこと、類例に乏しいことから、事例の紹介にとどめておき、詳細な評価は控えておきたい。(西脇)

5. 曲輪4

曲輪4は東西約20m、南北約6.4mで三日月形を呈する。曲輪2平坦面から曲輪4までの比高差は約4mを測る。当曲輪の平坦面はごく狭く、建物等の遺構は確認できなかった。曲輪の形状・大きさ、曲輪2との位置関係から、主要な曲輪というよりも帯曲輪としての性格が強いものと考えられる。

曲輪4では、S Z 928において大量の貝殻を確認した。その範囲は長辺2.2m、短辺0.64m、厚さ



写真11 堀底道 (S D 719)

0.2m程度であった。出土した貝の種類は二枚貝が多いが、約15cmの巻貝も含まれている。また、貝殻とともに羽釜も出土しており、伊藤裕偉氏による編年のⅢb～Ⅲc期に相当する。したがって、S Z 928の時期は15世紀後半～16世紀前半とみなせる。S Z 928は地山直上、あるいはわずかにその上層に位置する程度であることから、伊坂城の使用された期間のなかで比較的早い段階に形成されたことが分かる。

貝殻はS Z 928のほか、曲輪1 S K 705、曲輪2の土塁中、曲輪11盛土中においてもまとまって出土している。曲輪4を曲輪2の帯曲輪として評価するならば、曲輪4内だけではなく、曲輪2の機能と併せて考えるべきものであろう。

この他、曲輪4の流土から瀬戸美濃製品・常滑製品のほか、明の染付碗などが出土している。これらは16世紀前半を中心とするが、一部16世紀後半の製品も含まれる。これらは曲輪2から廃棄された可能性があるため、両曲輪の関連性を踏まえておく必要がある。(西脇)



写真 12 階段状の遺構 (S Z 908)



写真 13 曲輪 4 S Z 928 の出土状況

6. そのほか

(1) 堀底道 (S D 719)

S D 719 は曲輪 1・2 を分断する位置にあり、下端幅 4.3 m、深さ 4.5 m 以上を測る。麓の屋敷地から曲輪 1 に至る道としての機能と、曲輪 1・2 を防御する堀としての機能を兼ねている。したがって S D 719 は堀底道と評価できる。

堀底道は相対的に古く、やがて堀と道に分化する。S D 719 の存在によって伊坂城は、堀と道が未分化の段階にある、あるいは堀と道の分化を採用しない城づくりの系統にあることを示している。また、堀底道は、いわゆる織豊系城郭^④にはみられない特徴

といえる。他の諸点も考慮すれば伊坂城跡は、織豊系城郭とは異なる城づくりの系統にあると評価できる。

(2) 堀切 (S D 910)

曲輪 2 の東側に位置する下端幅 12 m、深さ 2 m 以上の堀である。南北方向に主軸をとり、この堀によって防御性の高い曲輪 1・2 とそれより東の平坦面を大きく分断している。こうした特徴から S D 910 は堀切といえる。

(3) 切岸と曲輪 13～16

曲輪 1・2 などは周りを斜面に囲まれている。この斜面は自然地形ではなく、人工的に削り落とすことで急な斜面を形成したものであることが判明した。いわゆる切岸である。この切岸によって斜面は急になるが、切岸下端には削った範囲に平坦面が形づくられた (曲輪 13～16)。曲輪 13～16 は、幅 8～10 m 程度で、帯状に連なる。この曲輪 13～16 から麓までは再び斜面が続き、やがて谷底に至る。

この斜面は人工的な掘削・整地などが認められなかったことから、自然地形と判断した。この自然地形の斜面から谷底の範囲は、城外といえるだろう。

(4) 堀切 S D 733 北側の平坦面

堀切の機能を果たす S D 733 より外側において、いくつかの平坦面が確認できた (曲輪 6・8・11)。これらの曲輪を断ち割った結果、いずれも盛土よって平坦面を形成していたことが判明した。旧表土直上および、盛土中・検出面において中世の土師器・陶器が出土したことから、当該期の遺構と判断できる。これらの曲輪において明確な建物は確認できなかったが、非常時などに多くの人が集まった際に、小屋掛けのための空間などとして利用された可能性

がある。詳細な検討が今後求められるが、ひとまず伊坂城に伴う遺構とみなしておきたい。

(5) 下層の調査

曲輪1と曲輪7について下層の調査を行った。その結果、曲輪1では北東隅付近で、溝SD 716が検出できた。曲輪7では地滑りによって堆積した層が確認できた。さらに地滑り層の下において溝を確認した。この溝からは、15世紀後半にさかのぼる可能性をもつ土師器の羽釜が出土した。これにより、伊坂城の築造時期は、おおむね15世紀末後半～16世紀初めに絞ることができる。(高松)

7. 遺物

伊坂城跡では、中世の土師器・陶器を中心に、中国(明)の染付皿、銭貨23点、火縄銃の弾1点、鉄製品44点以上、青銅製品6点、多量の貝殻などを確認した。土師器として皿・羽釜など、中世陶器として瀬戸美濃製品の天目茶碗・皿類・播鉢、常滑製品の甕が確認できた。総体として16世紀前半のものが多く、その前後のものも認められる。火縄銃の弾は直径11mm、6.73gの鉛製で、劣化のためか、やや小さい^⑤。銭貨については寛永通宝8枚を除くと、



写真14 出土遺物

中国からの渡来銭で唐銭から明銭まで多岐にわたる^⑥。

伊坂城の築造時期を知る遺物として、15世紀後半に遡る可能性をもつ土師器の羽釜が出土している。したがって伊坂城は15世紀後半～16世紀初めに築造されたと考えられる。一方、曲輪1などで16世紀後半の瀬戸美濃製品が出土していることから、伊坂城は当該期まで使用されたと考えられる。第1・2次調査における麓の屋敷地における調査でも、同様の時期の土器が出土しており、大きな齟齬はない。

(高松)



写真15 北からみた曲輪13～16と切岸



写真 16 上空からみた伊坂城

8. まとめ

以上から、伊坂城は15世紀後半～16世紀初めに築城されたこと、その後約100年使用されたことが出土遺物から明らかになった。約100年間の使用期間には何度かの改修を試みていることも遺構の重複関係から明らかになった。最も注目すべき遺構の櫓門SB715は、SD711・716よりも後に築かれていた。この改修によって城の守りを強固なものとし、その性格を著しく変化させたことが明らかになった。また、堀の底を道として利用していることから、織豊系城郭とは異なる特徴がうかがえる。こうした点から、伊坂城は地域での城づくりを高度に発達させた事例と評価できよう。

今回の調査において城主に関する知見は得られなかった。文献史料の検討から城主の検討を行うとともに、大規模な改修を可能とした背景についても、今後検討が求められるだろう。(高松)

[註]

① 三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』2003

三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡(第3次)発掘調査報告』2012

三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』IV 2014

② 遺物の編年観や名称等などは下記文献による。

常滑：中野晴久「渥美・常滑」『中世窯業の諸相』2005
愛知県『愛知県史』別編窯業3中世・近世常滑系 2012
瀬戸美濃：藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』高志書院 2008

藤澤良祐「瀬戸美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯 2002

愛知県『愛知県史』別編窯業2中世・近世瀬戸系 2007
土師器：伊藤裕偉「中北勢地域の中世土器」『三重県史』資料編考古2 三重県 2008

③ 三重県埋蔵文化財センター『多気遺跡群発掘調査報告II』1996

④ 千田嘉博『織豊系城郭の形成』東京大学出版会 2000

⑤ 金子浩之「城館跡出土銃・砲弾への評価」『中世城館の考古学』高志書院 2014

⑥ 永井久美男編『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会 1994

3 伊坂城跡（第7次）

1. はじめに

第7次調査は、同じく今年度に発掘調査を行った第6次調査の東隣に位置し、西区・中区・東区の3カ所に分けて調査を行った。中区の北側斜面は第4次調査を平成22年度に行っている。東区は丘陵東斜面、中区・西区は大半が北斜面に位置しており、中区・西区については斜面の一部をトレンチ調査している。調査面積は2,134㎡(下層94㎡含む)である。

2. 遺構

(1) 西区

第6次調査曲輪2の東に位置する調査区で、曲輪2とは堀切SD910により隔てられている。調査区北側は斜面であり、南側の平坦部は段状の平坦地が3カ所（西から曲輪A、曲輪B、曲輪C）確認できる。

曲輪Aは、南北約30m、東西最大約12mの曲輪が想定される平坦地であるが、調査地はその北部の南北約16mである。北東隅には登り口の可能性のあ

る階段状の地形がみられる。曲輪Aの東斜面は急斜面に削られており（SD1011）、曲輪Aと曲輪Bの高低差は約2mである。曲輪Aでは掘立柱建物3棟（SB1025・1026・1027）と方形土坑（SK1016・1021）、雨落ち溝の可能性のある溝（SD1028・1029）などを検出した。掘立柱建物はいずれも柱穴が径20cm程度と小さなもので、柱通りや柱間もあまり揃わないことから、簡易的な建物であったと考えられる。

曲輪Bは、東西約15mの平坦地で北東隅に高まりがみられる。盛土と考えられる上面を遺構検出面として検出を行ったが、遺構は確認できなかった。この盛土をトレンチ掘削した際に須恵器が出土したため、古墳および下層遺構の可能性が考えられたことから、1面調査終了後盛土状況の土層観察及び下層確認を行った。その結果この高まりは西側を盛土成形した後、高まりの幅をさらに拡張するために東側に盛土を行っていることが明らかとなった。盛土からは中世後期の遺物が出土しており、伊坂城の改修に伴い土塁が拡張された可能性が考えられる。下層



写真17 調査区遠景（東上空から）

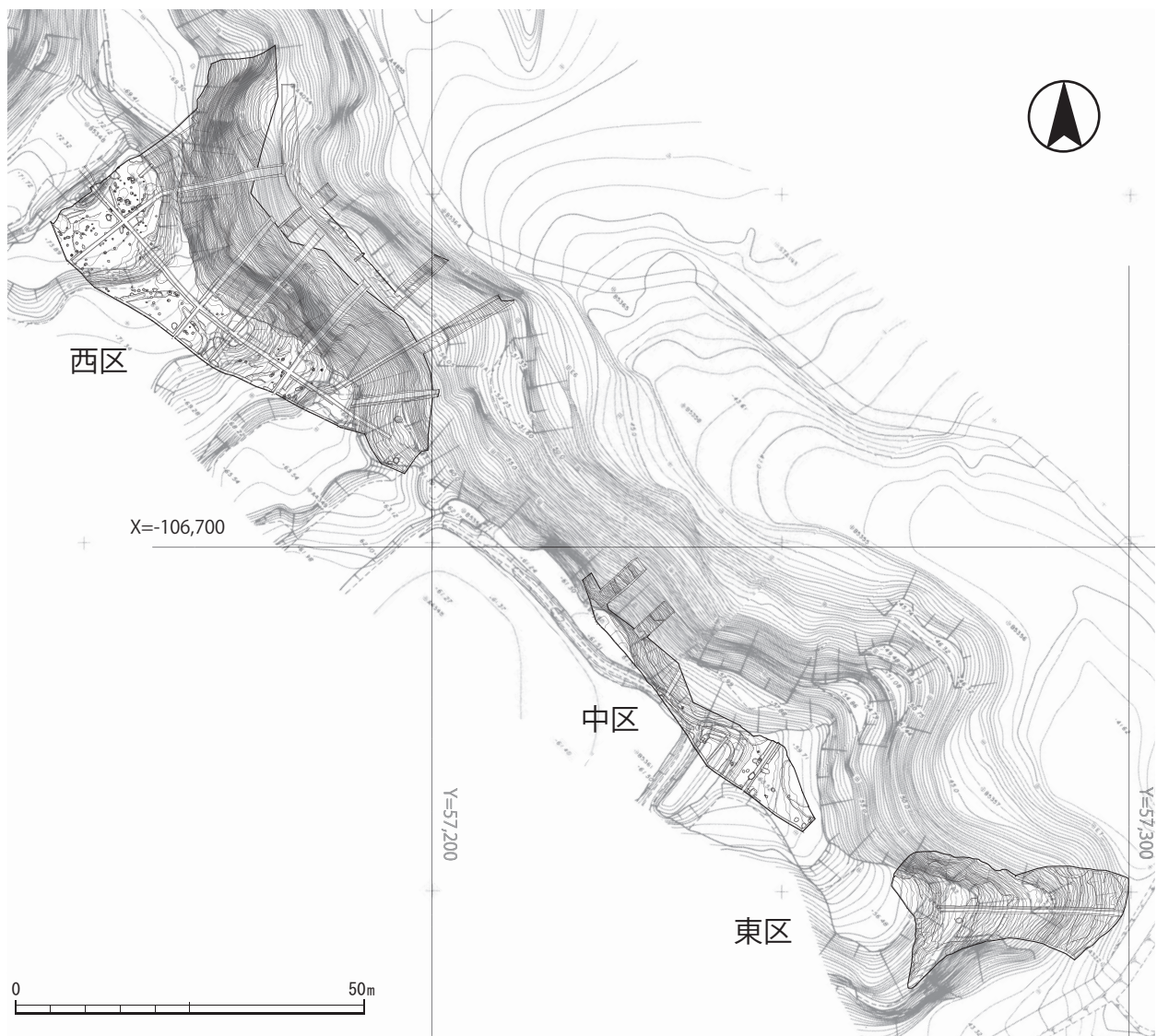


図8 調査区位置図 (1:1,000) (調査前地形図に合成)

遺構は確認されなかった。

曲輪Bからは、曲輪Aの北裾を通り、第6次調査の帯曲輪に続く犬走り状の平坦地が確認された。通路と考えられる。

曲輪Bと曲輪Cとの間の斜面はなだらかである。曲輪Cは、調査区の南端が1段低くなることから、調査区外に区画が展開するものと思われる。斜面からは土師器羽釜がまとまって出土した。北側は通路として利用されたと思われる曲輪Bから続く平坦地がある。

(2) 中区

中区は、溝で区画された東西約50mの曲輪と想定される場所の北東端にあたり、北側斜面の段状地形を第4次調査として実施している。検出した遺構は

土坑2基と溝がある。土坑SK1001は南北約1.2m×東西約0.9m、SK1002は南北約1.1m×東西約0.8mの隅丸方形を呈する土坑で、いずれも壁が熱を受けて硬化・赤変し、埋土は炭化材が厚く堆積する。狼煙、屋外炉などの可能性も考えられるが、SK1002からは骨片が出土しており、火葬土坑と考えられる。SK1001も同様であろう。炭化材の一部が掘り返されていることから、ここで茶毘に付した後、他の場所に埋葬したのと考えられる。

調査区中央部では周囲を溝で囲んだ土壇状の遺構を確認した。調査区南部にも広がっており、東西約5.0mで周囲に溝が巡る。上面では明確な遺構は確認できなかったが、トレンチ掘削の際、下層包含層と考えられる層が確認され、須恵器片が出土したこ

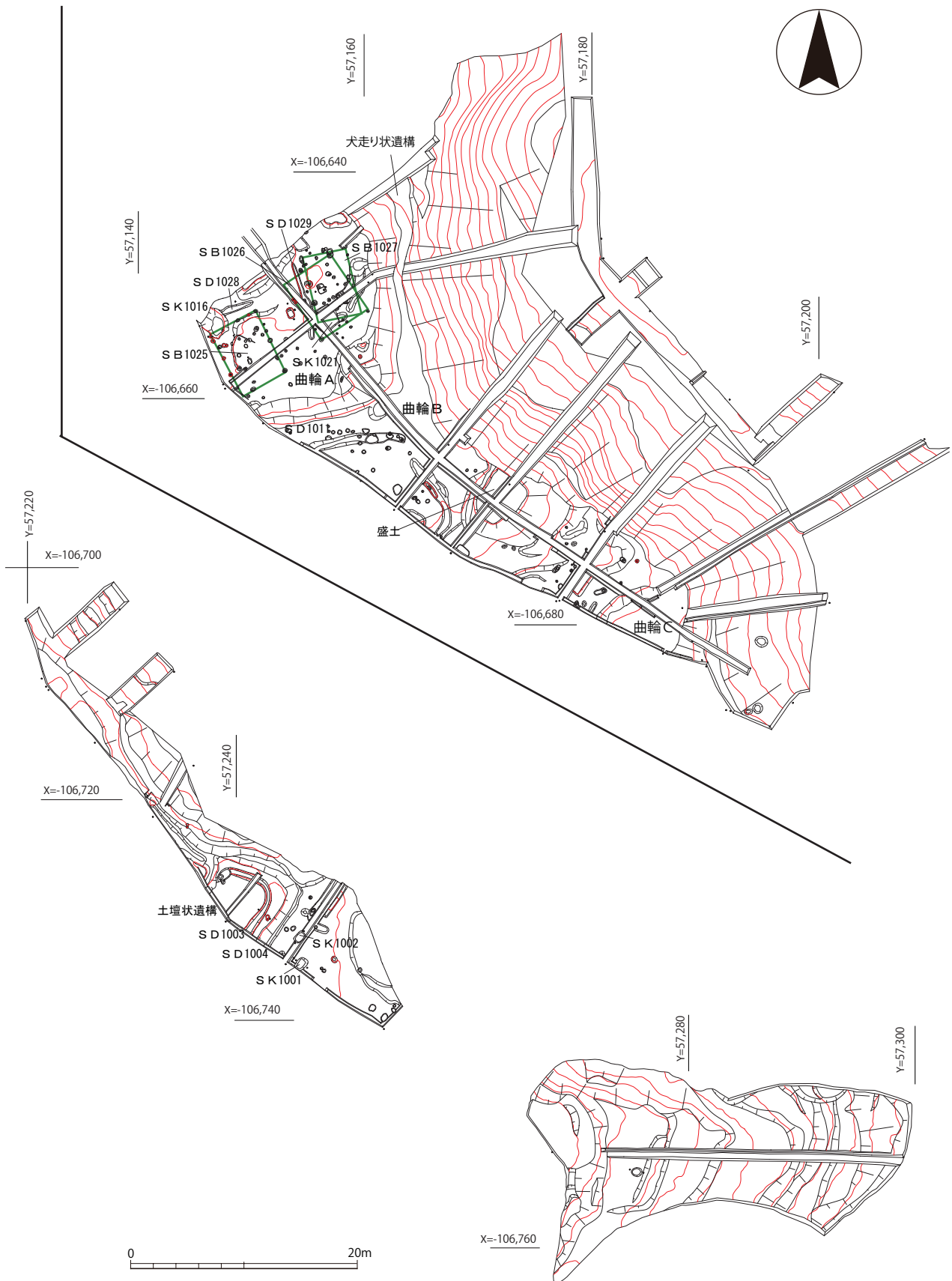


図9 調査区平面図 (1:500)

とから、下層調査を行った。下層では上層とは異なるL字に曲がる溝及びピットなどを確認したが、遺構からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。

(3) 東区

丘陵東端に位置する調査区で、斜面に位置する。明確な遺構は確認できなかったが、斜面を削って成形したと考えられる平坦面と階段状の通路になる可能性のある平坦面を確認した。その他の遺構は土坑状の浅い落ち込みを1基確認したのみである。

3. 出土遺物

第7次調査で出土した遺物は、コンテナバットで15箱、約31.5kgである。古墳時代から古代の須恵器も出土しているが、出土遺物の大半は中世後期の土師器・陶器である。瀬戸美濃産陶器は、藤沢編年の古瀬戸後IV期～大窯第3段階^①に属しており、15世紀後半から16世紀後半までの遺物と考えられる。

4. まとめ

伊坂城跡第7次調査は、屋敷地と想定される範囲の北西端にあたり、平坦面は非常に狭く、遺構は調査区外の南側に広がると考えられる。西区では、西端の最も高所にあたる曲輪Aで掘立柱建物3棟とそれに伴う土坑、溝を確認した。第6次調査区曲輪1、2を防御するための見張りのような場所であった可能性が考えられる。それ以外では調査範囲の制約もあり明確な遺構は確認できていない。中区では、火葬土坑と考えられる遺構を2基確認した。出土遺物がなく、伊坂城や屋敷地に伴う遺構であるかどうかは今後の課題である。

出土遺物では、遺構には伴わないものの須恵器が複数出土している。過去の伊坂城跡の調査でも古墳時代の堅穴住居や土坑などが見つかっており、丘陵全体に伊坂城築城以前の集落が存在していたものと思われる。

【註】

- ① 瀬戸美濃産陶器の編年については、愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 瀬戸系』（愛知県2007）を参考とした。



写真18 西区 SB 1025 (南から)



写真19 西区 曲輪B 犬走り状遺構 (東から)



写真20 中区 SK 1001 土層 (北から)



写真21 東区全景 (東上空から)

4 北山C遺跡（第5次）

1. はじめに

北山C遺跡は員弁川と朝明川との間、標高約60mの台地上に位置し、桑名市・東員町・四日市市にまたがる広大な遺跡である。

従来は弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡と考えられてきたが、平成24年度の第2次調査において古墳10基が確認され、古墳時代中期の古墳群でもあることが判明した。

今回の調査区は台地東端に位置し、遺跡の東端でもある。面積は9,047㎡である。

なお、古墳は西山古墳群に属するため、調査完了をもって「西山〇号墳」という名称を付与する予定であるが、平成27年度にも調査を行う区域があることから、本報告文中では調査中の遺構名称をそのまま使用する。

2. 遺構と遺物

古墳25基と墳墓（土壙墓・木棺墓）16基・掘立柱建物1棟・土坑3などを確認した。

墳墓については土層観察等で棺の痕跡を確認できたものを「木棺墓」、確認できなかったものを「土壙墓」と表記する。

(1) 古墳

25基を調査した。いずれも墳丘部分は削平され、大半は周溝を残すのみであったが、SD 88の中央では主体部（SK 202）を確認した。

古墳の形状は方墳24基、円墳1基で、規模は周溝を含めて一辺10～16mのものが多く、周溝は平面規模が最大のSD 176で幅2.8m程度、深さ50cmの断面逆台形を呈している。

以下、主な古墳について記述する。

SD 88・SK 202 第4次調査において南半部の溝が確認されていたが今回の調査の結果、方墳であることが判明した。

数条の攪乱溝によって一部破壊されているものの、周溝を含めて一辺がおよそ8m、周溝は幅0.4m、深さ8cmである。

検出した主体部SK 202は西端部分が攪乱溝によって一部壊されているが、残存している部分は長さ1.7m×幅0.8m、深さ28cmである。遺物としては、刀子が出土した。

SD 89 第4次調査において、SD 86・87とあわせて、ひとつの方墳として確認されていた溝であり、幅2.0m、深さ36cmである。

今回の調査で掘削したところ、埋土中よりガラス管玉1点を発見した。出土した土層は埋土としては上層にあたる。

SD 176 今回の調査で全体を検出したのものの中では平面規模が最大の方墳である。

規模は周溝を含めて一辺18.3～18.8m、周溝は幅2.5～2.8m、深さ50cmである。



写真22 SD 88, SK 202（南西から）



写真23 SD 176 土師器鉢出土状況（南から）

この周溝の埋土には多くの石が含まれており、土層の観察から、これらの石は墳丘側から流入したものであると考えられた。墳丘に葺石が敷かれていたと見られる。遺物としては、東溝から土師器甕と土師器鉢が、西溝から須恵器杯身が出土した。

S D 177 S D 176 と並び大規模な部類に入る古墳であるが、北側は斜面へと延びている。規模は周溝を含めて一辺 18.1 m、周溝は幅 1.9 ～ 2.7 m、深さ 35 ～ 60cm である。

この周溝の南溝ではほぼ中央に土橋状のたかまりが見られた。トレンチを入れ断面を観察した結果、古墳造営時に意図的に掘り残されたものと考えられた。このたかまりの中央で土師器の甕が、さらにはその下からやりがんな鉋が出土した。

その他の遺物としては、西溝から赤彩を施された土師器甕が出土している。

S D 195 平成 24 年度からの調査を通じて、初めて埴輪が出土した古墳である。

規模は周溝を含めて一辺が 13.5 m、周溝は幅 1.2 ～ 1.9 m、深さ 30 ～ 40cm の方墳である。攪乱溝によって一部破壊されているものの、残っていた周溝の埋土から円筒埴輪と家形埴輪が出土した。出土状況から墳丘上より流入したものと考えられる。

(2) 墳墓 (土壌墓・木棺墓)

あわせて 16 基を確認した。以下、主なものについて記述する。

S K 152 長さ 2.3 m × 幅 1.1 m、深さ 28cm の木棺墓である。南側に石が 3 個並べられており、棺台もしくは枕石と考えられる。遺物としては、石近くから鉄鎌が出土した。

S K 159 長さ 2.86 m × 幅 0.92 m、深さ 24cm の木棺墓である。棺を固定するためとみられる粘土が検出された。遺物としては鉄鎌・刀子と小型の砥石が出土した。

S K 185 長さ 2.7 m × 幅 1.4 m、深さ 26cm、最も多くの遺物が出土した木棺墓である。土層の観察等から 2 つの棺を南北に並べて埋葬していたことが判明した。北棺は長さ 1.8 m × 幅 0.4 m、深さ 20cm で、南棺は長さ 1.9 m × 幅 0.4 m、深さ 20cm である。

遺物としては、北棺側から勾玉 2 個と砥石が、南棺との間からも砥石と、その下から複数の鉄製品が



写真 24 S D 177 土橋状遺構、土師器甕 (西から)



写真 25 S D 195 円筒埴輪出土状況 (南から)



写真 26 S K 152 (北から)



写真 27 S K 185 砥石・勾玉出土状況 (東から)

出土した。さらに、棺の埋土をふるい掛けした際に、白玉4点を発見した。

S K 200 長さ2.0 m×幅1.1 m、深さ32cmの土壙墓である。

礫が掘形のほぼ中央、長さ1.1 m×幅0.5 mの範囲に敷かれ、埋土上面からの深さは20cmとなっており、その中央部はわずかながらくぼんでいる。

(3) その他の遺構

S B 180 規模としては1間×2間の掘立柱建物である。柱痕を確認したものの、遺物を伴っておらず時期は不明である。

S K 182・S K 186・S K 192 いずれも平面形はほぼ円形で、最小のS K 192が直径1.18 m、深さ66cm、最大のS K 182は直径1.4 m、深さ98cmの土坑である。すべてに中央に直径0.2 m程度、深さ10～30cmほどの小さな穴の痕跡がある。遺物は伴っていないが、その形状から縄文時代の落とし穴の可能性が考えられる。

3. まとめ

今回の調査では25基の古墳を調査した。周溝から出土した須恵器・土師器類の観察から、古墳の造営は5世紀後半頃であったと考えられる。

これまでに遺跡内で確認された古墳はあわせて45基となり、数の上では石薬師東古墳群^①に次ぐ、北勢地方屈指の規模となる古墳群であることが明らかとなった。古墳の一部で周溝が調査区南側へ延びるものが見られ、かつ南側には平坦な地形が広がっていることから、古墳の数はさらに増える可能性がある。

また、今回の調査の成果としては、新たに16基確認した墳墓も挙げられる。

これまでの調査では、古墳時代の墳墓は今回の調査区の南に接する第4次調査区で1基を確認したにとどまっており、遺跡北東端ならびに台地東端に位置する今回の調査区を特徴づけるものとなっている。

【註】

① 三重県埋蔵文化財センター『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告』2000、同『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第11次・第12次）発掘調査報告』2000



写真28 SK 200 (西から)



写真29 SK 182 (北から)



写真30 調査区全景 (南上空から)



写真 31 SK 185 出土砥石類



写真 32 SK 185 出土白玉



写真 33 SK 159 出土砥石

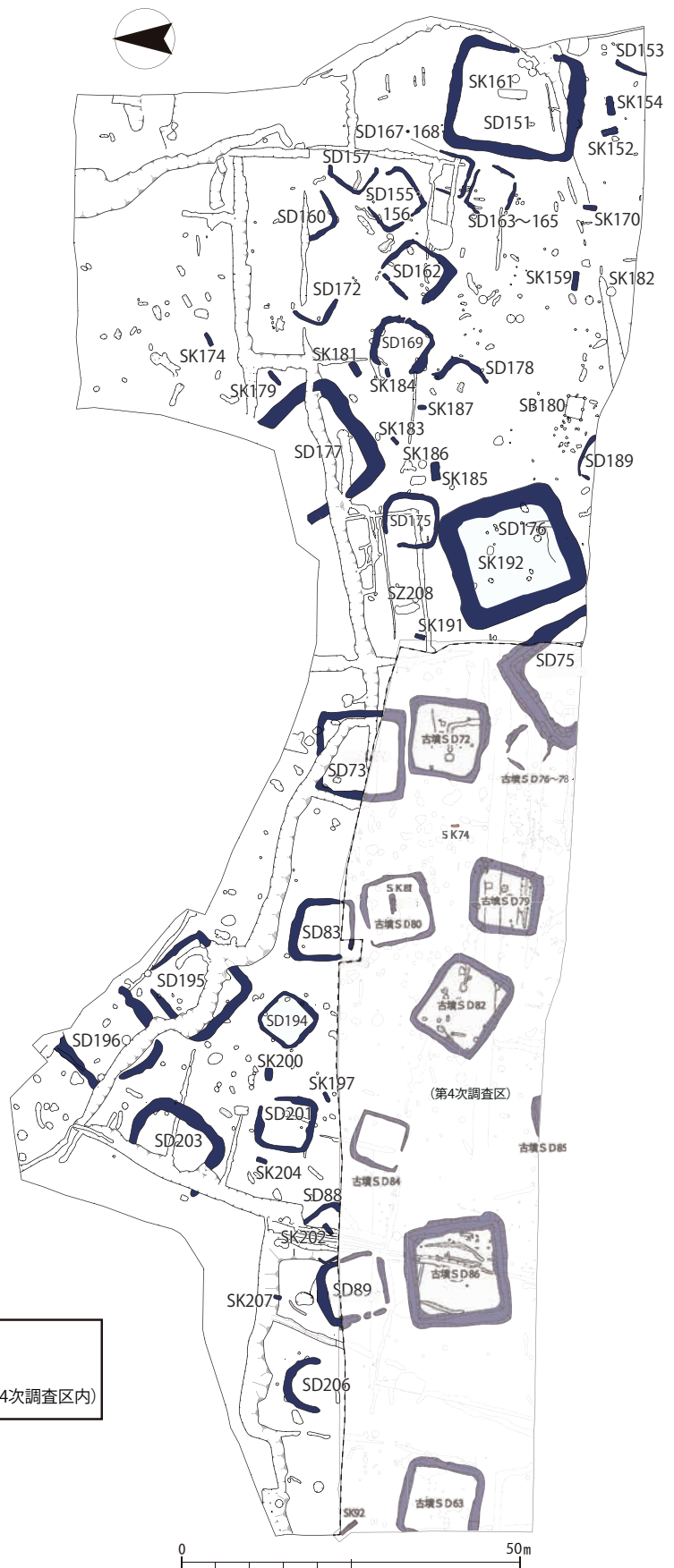


図 10 遺構配置図 (1:1,000)

5 北山A遺跡（第6次）

1. はじめに

北山A遺跡は四日市市北山町に所在し、中野山遺跡の東側に隣接している。遺構の分布状況や地形の連続性などから、両遺跡は連続する古代の集落跡として捉えられる（写真34）。

平成23年度から行っている近畿自動車道名古屋神戸線の建設事業に伴う調査としては、今回の第6次調査が最終年度となる。本調査区は平成23年度に行われた仮設道建設に伴う調査と平成25年度に行われた第5次調査の調査区に隣接している。

今回の調査では南区122㎡と北区634㎡の合計756㎡を対象としたが、遺存した遺構はまばらで、新規には竪穴住居1基と大型土坑1基および小土坑4基（図12）を検出したにとどまる。

2. 遺構

S H 401 削平が著しいために全形は確認できな

ったが、東壁の一部とカマドの焼成面および2基の主柱穴が確認できたので竪穴住居とした。S K 402の北西にある深さ10cmほどの段差について、S H 401の一部であることを検討したが、東壁と向きが対応しなかった。南北長については、主柱穴の位置から3.3m以上であると推測できた。建物の方位は、N 87° Wである。なお、時代を推定できる遺物は出土していないが、他の遺構と同様に飛鳥・奈良時代の遺構と考えてよいだろう。

S H 302 第5次調査で発見された竪穴住居である。今回の調査では、わずかに残った壁周溝により住居の北東隅から東辺の壁が確認できた。平面形は方形ないし長方形を呈し、東西長は5.7mである。南北長は南側が削平されていたために不明だが、約1.5m残存した。北面中央でカマドを、北東隅で貯蔵穴を検出した。また、主柱穴と思われる小穴を1基検出した。床面から土師器甕の口縁部（図11・2）と砥石（図11・5、写真36、図11・6）が出土した。



写真34 北山A遺跡遠景（上空東から）

さらに堅穴床面中央で焼土粒が混じる範囲を長径約1.5mの楕円状に検出し、土坑と考えて掘削したが、なだらかに落ち込み、深さも約3～20cmと均一ではなかった。したがって、これは土坑ではなくSH 302の築造時に焼土粒の混じった土で整地したものと考えた。土器はその際に整地土に混じりこんだものと思われる土師器口縁部(図11・1)が出土している。

SK 402 SH 302とSH 401を切る大型土坑である。平面形は不整長方形で、残存深は20～40cmである。底面は平底を呈する。当初、堅穴住居である可能性を考えて掘削を進めたが、北西隅は浅くなだらかに中心に向かって落ち、SK 402の床面とは段違いになった。したがって、北西隅は自然地形による落ち込みであると判断した。埋土の上部から須恵器杯の蓋(図11・3)と身(図11・4)が出土した。なお埋土の下部や床面から遺物は見つからなかった。

SB 343 第5次調査で確認された掘立柱建物である。今回の調査で新たに3基の柱穴を検出した。3間×2間の側柱建物で、東西が棟方向と推定される。規模は桁行5.1m、梁行4.2mである。梁行の柱間は2.1m等間で、桁行は西の柱間が1.5mで中央と東の柱間は1.8mである。棟方向はN55°Wである。建物の中央で小穴を検出したが、棟の柱筋上にあることから、棟持柱であった可能性も考えられる。SB 343の北側に、棟方向の方位がそろう掘立柱建物SB 344が第5次調査で確認されている。規模がほぼ同じである3間×2間の掘立柱建物であることから、2つの遺構には何らかの関係性があると思われる。



写真35 SH 401・SH 302・SK 402(北東から)

3. 遺物

出土した遺物は少なく小片であるが、土器1や土器2、土器4は口縁部が残っていたことから、時期を推測できた。おおよそ7世紀のものと考えられる。その他の出土遺物もその時代を覆すようなものではなかった。土器1・2はいずれも土師器甕と思われる。土器1は口縁部がゆるやかに外反し、口縁部から口縁端部が直線的に立ち上がる。土器2は口縁部が強く屈曲する。

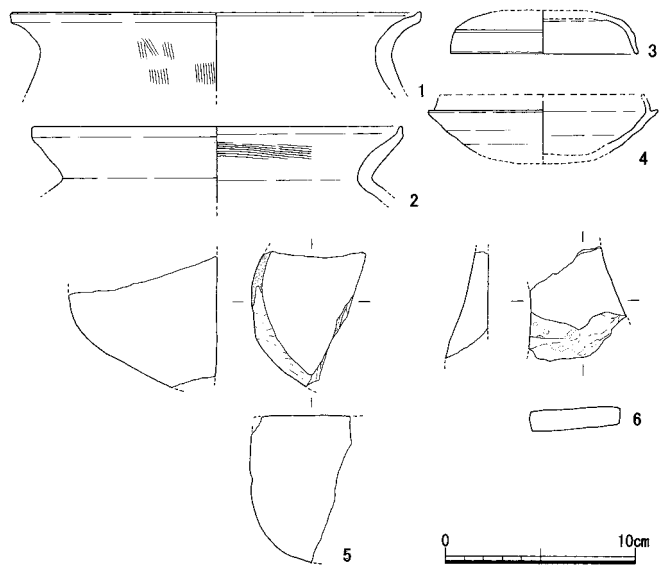


図11 遺物実測図(1:4)

4. まとめ

今回の調査では、先行する調査と同様に飛鳥・奈良時代の遺構を確認した。SH 302やSH 401より北では遺構が確認できなかった。また調査区の北西は谷筋に向かっている。以上の点から、今回の調査区は集落の北端にあたると考えられる。



写真36 SH 302出土の砥石

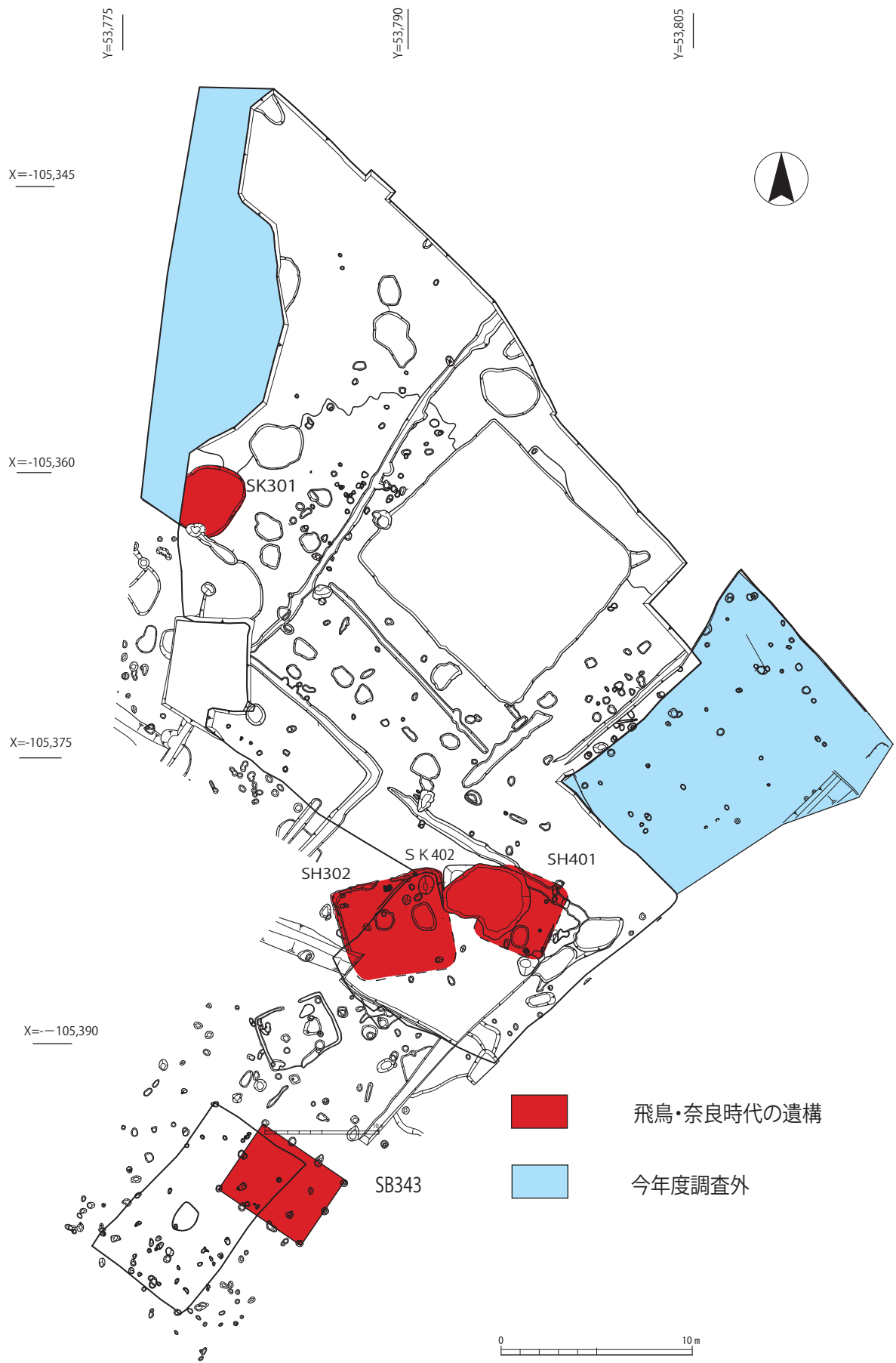


図 12 遺構平面図 (1 : 300)

6 中野山遺跡（第13次）

1. はじめに

中野山遺跡は、本年度の発掘調査で対象総面積の100%を終えた。最終調査である第13次は、遺跡西部の6,173㎡を対象とした（図4）。調査の結果、縄文時代から中世の遺構を検出した。

2. 遺構と遺物

（1）縄文時代

後期初頭の袋状土坑1基と小土坑5基、縄文土器片を伴うピットを僅かに検出した。袋状土坑は、隣接する過年度調査区（第9次・第12次）のものを合わせると7基を検出したことになる。中野山遺跡で希少な遺構である。

S K 1827（写真37） 調査区東部で検出した袋状土坑である。土坑東側上部をS H 1674に切られている。西側上部は削平されて本来の深さは不明である。残存部の径は0.9 m、深さは0.36 mを測る。



写真37 S K 1827（東から）



写真38 S K 1838（南から）



写真39 調査区全景（南西から）

床面から約0.15 m上で最大径1.05 mとなり、上部にいくにつれてすぼまる。埋土中層で後期初頭と推定される縄文土器片(図14-1・2)を検出した。土坑底部に被熱跡はみられない。

S K 1838 (写真38) 調査区東部で検出した小土坑である。上部は削平されて本来の深さは不明である。残存部の径は0.8 m、深さは0.28 mを測る。埋土上層から中層にかけて後期初頭と推定される縄文土器口縁部片(図14-3・4・5)や凹石を検出した。

(2) 古墳時代後期から飛鳥時代

竪穴住居15棟と掘立柱建物16棟、大型土坑7基、小土坑を確認した(表3・4)。竪穴住居の平面形は、方形もしくは長方形を呈する。掘立柱建物は総柱建物と側柱建物の双方が認められた。いずれも柱穴は小型であった。

S H 1820 (写真40) 調査区北東部で検出した竪穴住居である。東西4.5 m、南北4.25 mの方形を呈し南壁中央にカマドをもつ。径約45 cmの支柱穴を4基と南東隅に貯蔵穴を検出した。南東部には貼床が認められる。カマド掛口下から土師器甑1個体を、横倒し状態で検出した(写真41)。また、床面直上から須恵器甕片や砥石(長さ25.5 cm)、東側の土坑から径13 cmの須恵器杯身(1/3残存)と径14 cmの須恵器杯蓋(1/3残存)を検出した。

S B 1812 (写真42) 調査区北部で検出した掘立柱建物である。東西4.65 m、南北4.65 mを測り、桁行3間、梁行3間の総柱建物である。柱掘方は一辺約40 cmの隅丸方形を呈し、約16 cmの柱痕跡が認められた。2穴の重複が見られるものもある。柱間寸法は桁間、梁間ともに5尺+5.5尺+5尺を測る。遺物は出土していない。

S B 1817 (写真43) 調査区東部で検出した掘立柱建物である。東西5.1 m、南北3.6 mを測り、桁行3間、梁行2間の側柱建物である。西偏67°の東西棟でS B 1812と方向を同じにする。柱掘方から土師器片を検出した。土師器片は、周辺の竪穴住居から出土する遺物と同時期のものと推定される。

S K 1811 (写真44) 調査区北部で検出した大型土坑である。上部は削平されて本来の深さは不明である。平面形はいびつな楕円形を呈し、長径5 m、短



写真40 S H 1820 (北東から)



写真41 S H 1820 出土土師器甑 (南から)



写真42 S B 1812 (南西から)



写真43 S B 1817 (南東から)



図 13 遺構平面図 (1 : 500)

径 3.9 m、深さ 0.16 m を測り床面は平坦である。過年度調査区に見られる大型土坑と同様に、簡易な屋根が付けられた穴倉の可能性がある。床面から土師器片や須恵器片を多数検出した。須恵器杯身（写真 47 上）は大型で口縁部の立ち上がりが高く、内傾の度合いが低い。

(3) 中世

土坑 1 基を検出した。中野山遺跡全体において中世の遺構は寡少で、散在している。

SK 1828（写真 45）調査区東部で検出した土坑である。SH 1674 を切り、上部は削平されて本来の深さは不明である。平面形はいびつな四角形を呈し残存部は南北 1.2 m、東西 0.9 m、深さ 0.15 m を測る。床面や壁面の一部に被熱跡が認められる。中世の遺物は検出されず、SH 1674 のものと思われる土師器片や須恵器片が混入していた。土坑の形状や被熱の様子から中世墓と推定される。

3. まとめ

(1) 縄文時代

中野山遺跡の発掘調査を終え、遺構の分布状況が



写真 44 SK 1811（南から）



写真 45 SK 1828（南東から）

遺構名	平面形	規模	主柱穴	カマド	貯蔵穴	方位
SH1659	方形	5.2×4.8	2.25×2.1	北	北東隅	N4° E
SH1674	方形	8.0×8.0	4.5×4.5	北	南辺	N5° E
SH1680	方形	5.5×5	不明	不明	不明	N41° W
SH1688	方形	4×3.75	南北1.5	北	南東隅	N22° E
SH1805	矩形	4.5以上×4.5以上	2.4×1.8	不明	北東隅	N16° E
SH1808	方形	5.25×5.25	2.65×2.65	西	不明	N44° W
SH1813	方形	5.8×5.8	3.0×2.7	東	南東隅	N5° W
SH1814	方形	5.25×5.0	2.7×2.4	西	南西隅	N46° E
SH1818	長方形	7.0×6.0	3.3×3.0	西	東辺	N35° E
SH1820	方形	4.5×4.25	2.55×2.1	南	南東隅	N20° E
SH1821	方形	4.35×4.0	1.8×1.8	中央	南東隅	N54° W
SH1831	矩形	4.5以上×4.4以上	1.95×1.95	南	南東隅	N16° E
SH1832	方形	8.5×7.7	4.65×4.35	北	不明	N22° E
SH1834	方形	7.4×7.2	4.2×3.6	西	西辺	N68° W
SH1846	矩形	3.5×2.1以上	不明	不明	不明	N22° E

表 3 古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居一覧（単位はm）

遺構名	種別	規模	桁行間数(柱間寸法)×梁行間数(柱間寸法)	方位
SB1698	側柱	5.55×3.45	3(1.95+1.65+1.95)×2(1.95+1.5)	N13° E
SB1801	側柱	6.45×5.4	4(1.8+1.5+1.5+1.65)×3(1.8+1.8+1.8)	N62° W
SB1812	総柱	4.65×4.65	3(1.5+1.65+1.5)×3(1.65+1.5+1.5)	N67° W
SB1817	側柱	5.1×3.6	3(1.5+2.1+1.5)×2(1.8+1.8)	N67° W
SB1822	側柱	7.2×5.25	4(1.8+1.8+1.8+1.8)×3(1.8+1.65+1.8)	N78° W
SB1824	総柱	3.0×3.0	2(1.5+1.5)×2(1.5+1.5)	N76° W
SB1825	側柱	5.7×3.6	3(1.8+2.1+1.8)×2(1.8+1.8)	N7° E
SB1826	総柱	3.6×3.3	2(1.8+1.8)×2(1.65+1.65)	N12° E
SB1829	総柱	3.6×2.4	2(1.8+1.8)×2(1.2+1.2)	N72° W
SB1833	側柱	7.65×3.6	4(1.8+1.8+1.95+2.1)×2(1.8+1.8)	N83° W
SB1835	総柱	4.2×3.6	2(2.1+2.1)×2(1.8+1.8)	N77° W
SB1843	側柱	4.5×3.6	3(1.5+1.5+1.5)×2(1.8+1.8)	N68° W
SB1844	総柱	4.2×4.5	2(2.1+2.1)×2(2.4+2.1)	N8° E
SB1845	総柱	4.2×3.3	2(2.1+2.1)×2(1.65+1.65)	N4° E
SB1847	側柱	5.7以上×5.1	3以上×4(不等間)	N59° W
SB1848	総柱	5.7×4.2	3(2.1+2.1+1.5)×2(2.1+2.1)	N14° W

表 4 古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物一覧（単位はm）

明らかになった。台地北辺にあたる遺跡東部には、早期や中期の竪穴住居、早期の煙道付炉穴や集石炉、晩期の土器棺墓がみられる。遺跡中央部から西部にかけて、中期から後期初頭の小土坑や袋状土坑が散在していることがわかった。前期の遺構は未確認だが、約7,000年にもわたり台地を利用していた人々の生活の一端を知ることができた。

(2) 古墳時代後期から飛鳥時代

第13次調査の竪穴住居や掘立柱建物は、調査区の東部に集中していて西部にはみられない。これらの遺構は、東に隣接する過年度調査区(第12次)で確認している建物群と同時期のまとまりであると想定でき、中野山遺跡西端の集落と考えられる。

掘立柱建物や竪穴住居のなかには方向を同じにし、北辺や南辺、または東辺や西辺を揃えるもの(SH 1820・SH 1832・SH 1834・SB 1812・SB 1817のグループやSB 1698・SB 1822・SB 1835のグループ)があり、同時期に計画的に建てられたことが想定される。

中野山遺跡全体で200棟をこえる古代の建物を確認したことになり、北勢地方では最大級の集落遺跡であることが明らかになった。今後も集落について詳細に検討していく必要がある。



写真46 石鋸(上) 切目石錘(下)



写真47 須恵器杯・蓋 SK 1811 出土(上)
SH 1813 出土(下)



写真48 須恵器甕 (SH 1813 出土)



図14 出土土器実測図(1:3)

7 北山城跡・居林遺跡（第4次）

1. はじめに

北山城は、朝明川左岸台地西端に位置する城館で、中～近世の文献や資料には北山城に関する記載はない。しかし、近江から桑名を結ぶ近世八風街道沿線の丘陵や台地上には、市場城や源治山城、萱生城といった、中世後期に位置づけられている城館が点在^①しており、北山城もそれらとともに、一連の城館と考えることができる。また、市場城の縄張りと同様のも、それを裏付けると言えよう^②。

これまで平成23年度から、3次にわたる調査が行われており、今年度が第4次調査となる。平成24・25年度の第2・3次調査では、台地上平坦面および西側斜面裾部を中心に、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の竪穴住居59棟を確認している。また西側斜面裾部では、奈良時代の掘立柱建物、平安時代の土坑、斜面中腹部では居林古墳群に関連すると思わ

れる古墳の周壕状の溝が確認されている^③。

今年度の第4次調査区は、第2次調査区の北側および第3次調査区の東側にあたる台地上平坦面の6,948㎡を対象として掘削し、弥生時代後期の竪穴住居14棟、古墳時代前期初頭の竪穴住居53棟、掘立柱建物2棟、古代の土坑1基などを確認した。これにより、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居の合計棟数は126棟になり、四日市市山奥遺跡^④や同市久留倍遺跡^⑤に比肩する集落規模であることが明らかとなった。その他、古代の土坑や城館にもなる可能性のある溝2条を、確認した。

また、今年度調査により、城館よりも古い時期の集落遺構（主に古墳前期初頭）が城館下層に展開することが明確となったため、城館範囲下層およびこれまでの第2・3次調査で確認した集落遺跡を北山城跡とは異なる性格をもつ「居林遺跡」として新規登録を行った。（宮原）



写真 49 調査区全景（東から）

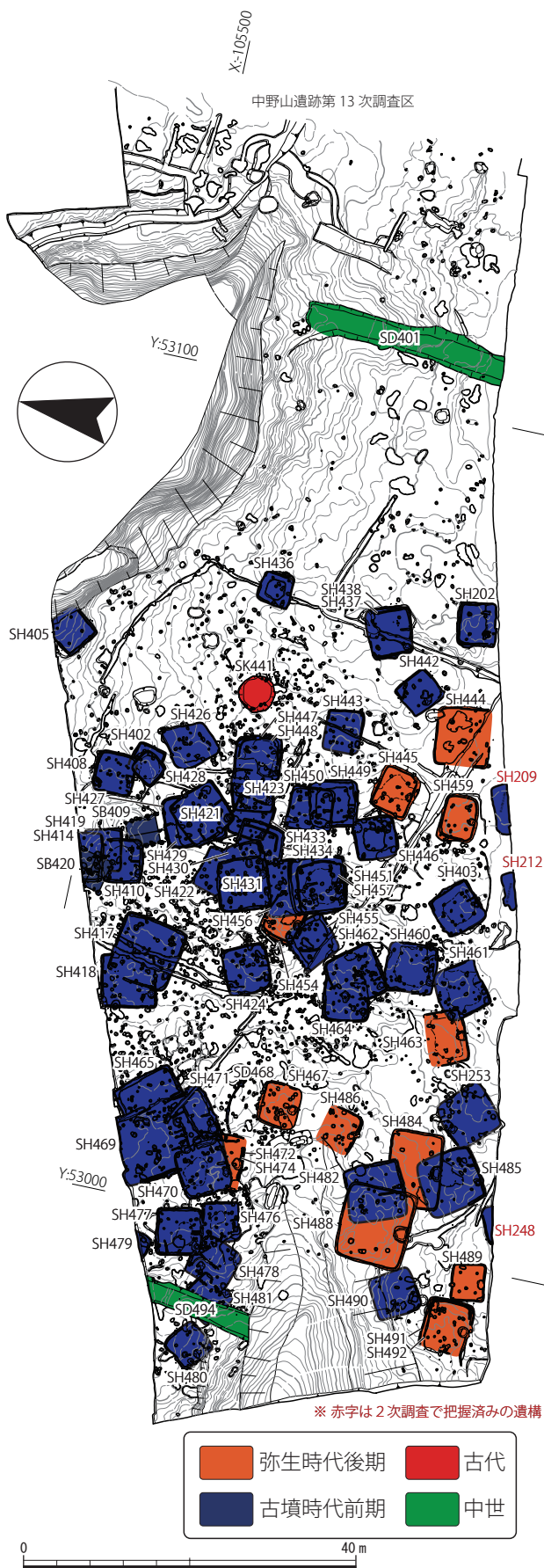


図 15 調査区平面図 (1 : 800)



写真 50 S H 482・484・488 周辺 (東から)



写真 51 S H 402 以西の竪穴住居群 (東から)



写真 52 S H 465・469・470 周辺竪穴住居群 (南から)

2. 遺構

(1) 弥生時代後期の遺構

竪穴住居（表5、写真50・53～56）計14棟を確認した。調査区西側、特に南西側に集中する。いずれも隅のやや円い方形プランで、SH463やSH484のように、一辺が長い方形プランもみられる。その他の住居も、全般的に一辺の長い方形を志向し、長軸÷短軸の数値が1.1を超えるものが、規模の確定した^⑬13棟中11棟ある。後述する古墳時代前期初頭の住居（表6）と比較するとその偏りは明瞭である。

規模はSH484やSH488（写真50）で、一辺が9mを超える住居がみられた。一辺が9mを超える住居は、朝明川流域弥生時代後期竪穴住居の平均規模が約6.2m（山奥遺跡、西ヶ広遺跡、城ノ谷遺跡、辻子遺跡、金塚遺跡、北山城跡から一辺の全長が計測可能な146棟から算出した平均値）であることから、大型住居に該当すると言える。これまで朝明川流域では、山奥遺跡のSH178（9.8×8.8m）^⑭および西ヶ広遺跡のSH206（9.0×8.7m）、SH211（10.0×9.9m）^⑮、中野山遺跡のSH1646（9.2×7.9m）^⑯の4棟が一辺9mを超える住居として

遺構名	規模		長軸/ 短軸	貯蔵穴の 位置
	長軸	短軸		
SH444	7.2	6.7	1.07	南辺中央
SH445	5.7	5.1	1.13	南辺中央
SH454	(5.2)	4.9	-	南辺中央
SH459	5.4	4.4	1.21	南辺中央
SH463	6.5	4.4	1.47	南辺中央
SH467	5.4	4.9	1.09	南辺中央
SH472	6.8	5.6	1.20	南辺中央
SH474	6.1	5.4	1.14	南辺中央
SH484	9.3	6.4	1.45	南辺中央
SH486	(4.7)	(3.5)	-	南辺中央
SH488	9.5	8.5	1.12	南辺中央
SH489	4.6	4.1	1.12	南辺中央
SH491	6.3	5.8	1.10	南辺中央
SH492	6.1	5.0	1.23	南辺中央

※（ ）内は残存状況で計測した数値

表5 弥生時代後期の竪穴住居一覧



写真53 SH 445（北東から）



写真54 SH 459（北から）



写真55 SH 463（北から）



写真56 SH 445 主柱穴遺物出土状況（南から）

確認されており、今後、集落内の大型住居とその他の住居における性格の差異などの解明が求められる。

住居に付属する施設は、4本の支柱穴を有する点は古墳時代前期初頭と通じるが、南辺の中央に貯蔵穴を有する点や、間仕切溝、貼床構造を有さない点は大きく異なる。また古墳時代前期に比して、地床炉を有するものは少なく、こうした古墳時代前期初頭のものとの差異が、居林遺跡のみに該当するものかどうか、今後、検討が必要であろう。

その他の遺構 多数のピットを確認したが、掘立柱建物や柵列を構成するものはなかった。

(2) 弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の遺構

竪穴住居 (表6、写真51・52・57～60) 計53棟を確認した。弥生時代後期同様に斜面側の調査区西側、特に中央から北側に集中する。北側の事業地外、北山城跡の下層でも多数の竪穴住居が存在しているものと思われる。集中する箇所では、10棟前後の切り合いがみられた(写真51・52)。いずれも方形プランで、長軸÷短軸の数値が1.1を超えるものは、規模の確定した30棟中4棟のみで、1.2を超えるような明確に一边が長い方形プランはみられなかった。

規模は最小で一辺3.3m、最大で一辺8.4mである。住居に付属する施設は、4本の支柱穴を有し、中には柱痕が明確なものもある(写真60)。貯蔵穴は、ほぼ南辺の西側に設けられている。また、南辺中央に間仕切溝を設けるものや壁柱穴を有するもの(写真59)もみられ、弥生時代後期とは異なる様相を示す。

掘立柱建物 調査区の北側で側柱建物1棟と総柱建物1棟を確認した。

S B 409 (写真61) 柱間が2間×4間の不整形の側柱建物で、規模は4.0×4.3mである。棟側の柱間間隔は狭く、0.6～1.1m、梁側の柱間は1.3～2.0mとどちらも不均一である。柱穴の規模は、0.3～0.5mである。独立棟持柱建物とも考えられるが、棟持柱に該当する柱穴は、他よりも浅く、平面も不整形である。ただ、この棟持柱状の柱が無い場合、梁間が3.6mとなり建物の構造が不安定となる。そのため、2列の柱列の可能性もある。時期を古墳時



写真 57 S H 402・408・428 (南東から)



写真 58 S H 449・450 (南から)



写真 59 S H 462・464 (南から)



写真 60 S H 449 支柱穴土層 (南から)

代前期初頭とする理由は、柱穴から多数の当該期の土器が出土していることと、切り合い関係から古墳時代前期初頭のSH410に先行するための2点である。

SB420 (写真62) 2間×2間以上の総柱建物で、規模は4.6×4.4m以上である。柱間間隔はいずれも約2.0mでほぼ一致する。柱穴の規模は0.6～0.7mとSB409に比べて大型で、深さもほぼ均一

遺構名	規模		長軸/ 短軸	貯蔵穴の位 置
	長軸	短軸		
SH402	3.5	3.3	1.07	北東
SH403	5.6	5.4	1.03	南西
SH408	4.9	4.8	1.03	南西
SH417	6.6	6.6	1.00	南西
SH418	8.1	8.1	1.00	南西
SH421	6.3	6.3	1.01	南西
SH423	5.1	5.1	1.00	南西
SH424	5.8	5.5	1.05	南西
SH426	5.3	5.3	1.00	—
SH427	7.3	6.3	1.16	南西
SH431	6.3	6.3	1.01	南西
SH433	5.1	4.8	1.06	南西
SH434	5.6	4.9	1.13	南西
SH436	4.1	3.9	1.06	南西
SH437	6.1	5.2	1.17	南西
SH438	5.5	5.2	1.07	—
SH442	4.6	4.4	1.05	—
SH446	5.1	5.0	1.02	—
SH449	5.9	5.6	1.05	南西
SH450	5.5	5.3	1.03	南西
SH451	7.2	6.9	1.04	南西
SH457	6.2	5.5	1.12	南西
SH460	5.8	5.4	1.07	南西
SH461	6.0	5.7	1.05	南西
SH462	6.3	6.3	1.01	南西
SH464	5.5	5.1	1.07	南西
SH470	6.3	6.0	1.05	南西
SH477	5.7	5.6	1.01	南西
SH482	6.8	6.7	1.01	南西

※全堅穴住居53棟中の規模が確定できた29棟を抜粋して掲載

表6 古墳時代前期初頭の堅穴住居一覧 (抜粋)

である。

柱穴から古墳時代前期初頭の土器が出土しており当該期に位置づけている。ただ、切り合い関係では古墳前期初頭のSH410に後出するため、その際に混入した可能性もあり、時期は不確定である。

(3) 古代以降の遺構

古代の遺構は、台地奥部で隣接する中野山遺跡と比較すると少なく、調査区中央東寄り、奈良時代の須恵器や土師器の出土した土坑SK441を1基確認したのみである。過去の調査では、西側斜面裾部で、平安時代の土坑や飛鳥～奈良時代の掘立柱建物が確認されている。

その他、城と関連する時期の遺構の可能性のあるものとして、SD401(中野山9次SD11301と同一の溝)とSD494が挙げられる。両溝は、尺間法の1町に近い数字である約110mの間隔で、並走する可能性があり、郭間を区切る堀状の性格が考えられる。ただし、どちらの溝からも出土遺物は皆無のため、時期は断定できない。(宮原)



写真61 SB409 (南から)



写真62 SB420 (南から)

3. 遺物

今回の調査では、コンテナバット 121 箱分の遺物が出土した。

土器の時期は、弥生時代後期～古墳時代前期初頭である（写真 63）。第 2 次調査と同様に、竪穴住居の廃絶後に堆積したと考えられる土器群が多いため、山中式併行期に機能した住居の埋土上層に、廻間式併行期^⑩の遺物が含まれることがある。器種は甕・壺・高杯などが主体で、ほとんどが在地産である。複数個体出土した手焙り形土器のなかには、近江地域からの搬入品と考えられる個体がみられる。

石器は、柱状片刃石斧・砥石・石皿・台石が出土した。S H 467 から出土した柱状片刃石斧の大きさは長さ 5.1cm・幅 1.1cm で、共伴した土器から時期は弥生時代後期と考えられる。砥石は小型のものである（写真 64）。

金属製品は、古墳時代前期の竪穴住居 S H 421 から鉄製の直刃鎌が出土した。（相場）



写真 63 出土土器



写真 64 出土石器

4. まとめ

これまでの 4 次におわたる調査で、弥生時代後期～古墳時代前期初頭の竪穴住居、合計 126 棟を確認した。内訳は、弥生時代後期が 58 棟、古墳時代前期初頭が 68 棟である。

集落の変遷をみると、居林遺跡の集落分布域より東に約 150 m の空白地を経て、弥生時代中期末葉～後期の竪穴住居が中野山遺跡（第 12 次）で 9 棟確認されており、まず台地奥部より集落の形成がはじまったと考えられる。その後、台地先端部へ移行し、弥生時代後期でも新しい段階には、西側の緩斜面にも竪穴住居が確認されている。そして古墳時代前期初頭には、斜面から住居がなくなり、再び台地平坦面が主体の集落構成となるようである。弥生時代中期末葉～古墳時代前期初頭にかけて、このように集落立地が変遷をたどる背景には、朝明川流域における何らかの事象が関与しているものと考えられ、今後、より詳細に当該期の集落推移を整理する必要がある。（宮原）

[註]

- ① 伊藤徳也『再発見・北伊勢国の城』2008
- ② 高田徹「織豊期における北勢四郡の城館」『中世城郭研究』8号 中世城郭研究会 1994
- ③ 三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT～亀山西 JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅲ・Ⅳ 2013・2014
- ④ 四日市市教育委員会『山奥遺跡』Ⅰ・Ⅱ 四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 31・32 2003・2004
- ⑤ 四日市市教育委員会『久留倍遺跡』5・6 四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 46・47 2013・2014
- ⑥ 長軸および短軸、両側の住居壁および周壁溝が残存しているもの。
- ⑦ 前掲④のⅡ。
- ⑧ 四日市市教育委員会『西ヶ広遺跡発掘調査報告-D 地区-』四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書 6 1972 三重県教育委員会「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970
- ⑨ 前掲③のⅣ。
- ⑩ 前掲③のⅢ。
- ⑪ 財団法人愛知県埋蔵文化財センター『廻間遺跡』1990

8 小牧南遺跡（一次）

1. はじめに

当遺跡は四日市市小牧町に所在し、朝明川南岸の台地斜面に位置する集落遺跡である。平成 25 年度の調査では縄文時代と古墳時代の集落跡が確認されている。

今回の調査区は遺跡全体の北東隅にあたる。

現在は宅地となっているが、かつては谷地形であり、南側に隣接する区域で行った平成 24 年度の一次調査で地形の大きな落ち込みが確認されている。

2. 調査の概要と結果

3本の調査坑（T4～6，計 165 m²）を設定し調査を行った。

現地表からの深度 30 cm～60 cm で明褐色シルトを主体とした地山面に達し、この上面で住宅建設に伴う現代の攪乱溝と木根痕・風倒木痕を検出した。

またT4・T5の西側およびT6の南西側では谷

状の落ち込みがみられ、現地表からの深度は確認できる最深の箇所まで 2.8 m に達した。

いずれの調査坑からも遺構・遺物は確認されなかったため、当調査区の範囲については二次調査の対象外とした。



写真 65 T5 全景（東から）

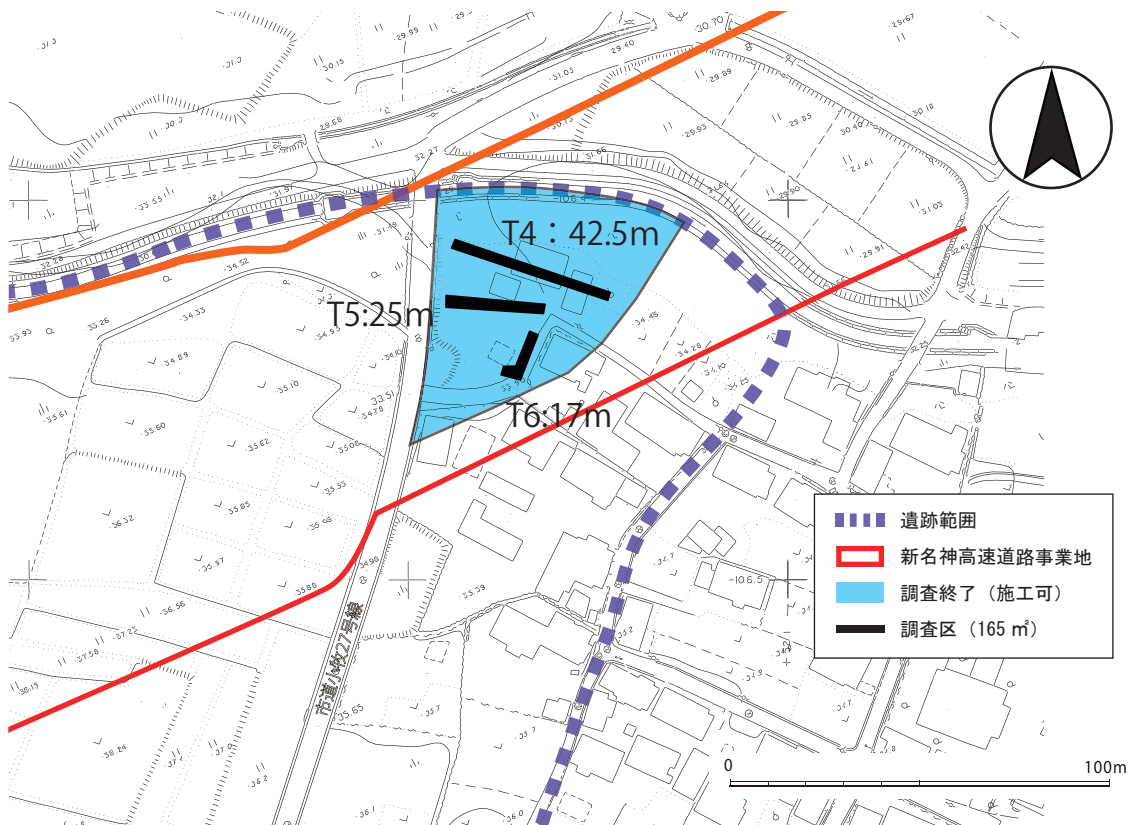


図 16 調査坑配置図（1:2,000）

9 棕ノ木遺跡（一次）

1. はじめに

棕ノ木遺跡は、海蔵川右岸の扇状地に立地し、三重郡菰野町池底と潤田に所在する。陶磁器類が採集されており、中世から近世の包蔵地として、菰野町遺跡番号135として登録されている。なお、池底の地名の由来となった池が周辺に点在していたが、昭和39年の圃場整備事業によって全てなくなっている。

2. 調査の概要と結果

今年度は、6月に路線内の北側ほぼ中央で、3月にその南隣で一次調査を行った。6月の調査では、幅2mの調査坑を4本（T1～T4：延長87m）設定して遺構・遺物の有無についての調査を行った。遺物は、T2から須恵器小片・山茶碗小片が出土したが、大半は近現代の陶器片である。また、各調査坑で、攪乱と近現代の溝（落ち込み？）を確認したにとどまり、明確な遺構は確認されなかった。

3月の調査では、幅2mの調査坑を4本（T5～T8：延長93m）設定して調査を行った。調査の結果、T5とT6では、広範囲に造成土が入っていることを確認し、T7とT8では、近現代の耕作に伴う攪乱を認めたにとどまった。いずれの調査坑からも、遺構・遺物は確認されなかった。

今年度の2回にわたる一次調査により、事業地内の14,000㎡すべての調査が終了した。



写真 66 T3（東から）



写真 67 T8（南西から）

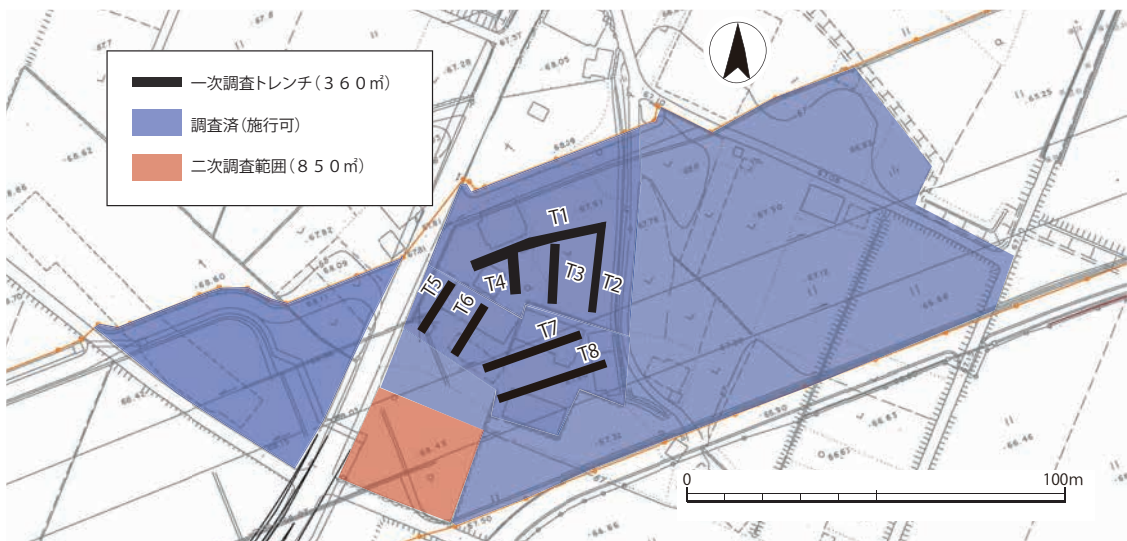


図 17 調査坑位置図（1：2,000）

10 棕ノ木遺跡（第2次）

1. はじめに

棕ノ木遺跡は、三重郡菰野町池底と潤田に所在し、海蔵川右岸、鈴鹿山地から広がる扇状地に立地する。今回は、平成25年度の一次調査結果をもとに850㎡を対象として調査を行った。

2. 遺構と遺物

7世紀中頃の竪穴住居5棟（SH1、SH10、SH12、SH16、SH19）及び土坑1基（SK22と、江戸時代以降の溝（SD4など）を複数検出した。調査区北側約100㎡はコンクリートなどが入り、広範囲に攪乱されていた。

（1）竪穴住居

SH1は一辺約5mの方形をなし、南辺東端にカマドを持つ。煙道は、一部がSD4によって切られていた。北辺のほぼ中央部で北東方向へ伸びる突出部があり、初めはこれが煙道と思われた。しかし、土師器長胴甕の体部片が比較的まとまって出土したものの、焼土などカマドの痕跡はなかった。また、カマドの東で貯蔵穴を、床面では焼土面を確認した。

SH10は一辺約5mの方形をなし、西辺にカマド及び煙道を持つ。床面では硬化面を確認した。

SH12は一辺約4.5mの方形をなし、西辺にカマドを持つ。床面で硬化面を確認した。

SH16は一辺約4mの方形をなし、東辺にカマドを持つ。しかし遺構の南端から北東部にかけて、一次調査と重なっており、またSH10と重複しており、

残存状況はよくない。

SH19は一辺約4mの方形をなし、東辺にカマドを持つ。このカマドからは2つの煙道が伸びていた。また、カマドの南東で貯蔵穴を確認した。ここからは、須恵器杯蓋、杯身などの土器が出土した。

これら竪穴住居のカマドの位置は特定の方向に揃っていない。またSH10・SH16・SH19の3棟は、どれも隣り合う竪穴住居と重複している。

（2）その他の遺構

SK22は調査区の南東部で検出した。SD4及びその他いくつかの耕作溝に切られており、全体の形がとらえにくい。出土遺物から、5棟の竪穴住居と同じ時代の遺構と考えられる。

（3）遺物及び下層調査

飛鳥時代の遺物が出土した。ただし、SH19の埋土中から弥生時代中期の壺頸部と甕口縁部が出土したことから、下層遺構の存在の可能性を考え、2本の調査坑を設けて下層を調査した。しかし、遺構や更なる遺物の確認はなかった。

3. まとめ

今回の調査で、これまで中世以降の遺跡であると考えられてきた棕ノ木遺跡に、飛鳥時代の集落跡があることが判明した。しかし、今回の調査区だけに竪穴住居があったとは考えにくい。

弥生時代中期の土器が出土したことから、近辺での弥生時代の遺跡の存在も予想される。



写真 68 調査区全景（東上空から）



写真 69 SH1（北から）



写真70 SH19 (西から)



写真71 SH10 カマド (東から)

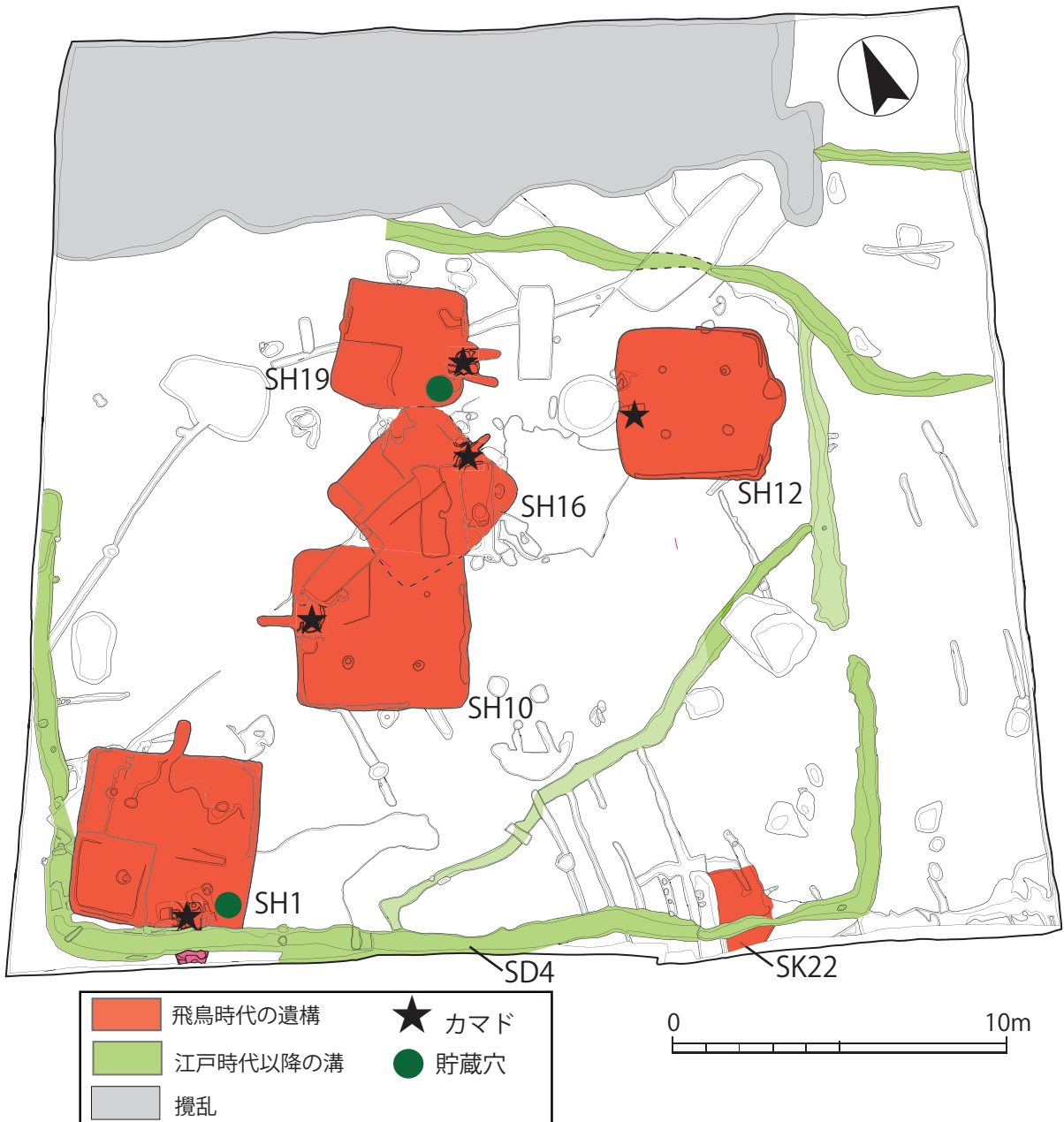


図18 遺構配置図 (1:200)

11 高ノ瀬遺跡（一次）

1. はじめに

高ノ瀬遺跡は鈴鹿市山本町字高ノ瀬に所在し、扇状地の扇端、標高 159～162 m に位置する。現況は畑地および宅地である。

平成 22 年度の分布調査では、灰釉陶器片や山茶椀片が広範囲にわたり発見されている。これを受けて行われた平成 24 年度の調査では、調査坑のひとつから土師器甕の底部が出土したものの、遺構は発見されていない。

2. 調査の概要と結果

8 本の調査坑（T 22～29、計 715 m²）を設定し調査を行った。表土および黒色土の下、深度 40～100cm で粘質土の層に達した。この上で攪乱穴を複数検出したものの、遺構は検出されなかった。その下は粘質土と砂利とが互層をなしていたが、いずれの層でも遺構は検出されず、安定した遺構検出面は見られなかった。

また、遺物として T 24 から土師器・灰釉陶器の小片が、また T 29 から土師器の小片が少数出土したが、いずれも攪乱穴からのものである。

さらに新名神高速道路建設に伴う集落排水管移設工事に伴い、延長 54 m、幅 1 m で工事立会を行った。遺構・遺物は確認されなかった。

以上の調査結果から対象範囲の二次調査については必要がないものと判断した。



写真 72 T 25 全景（北から）

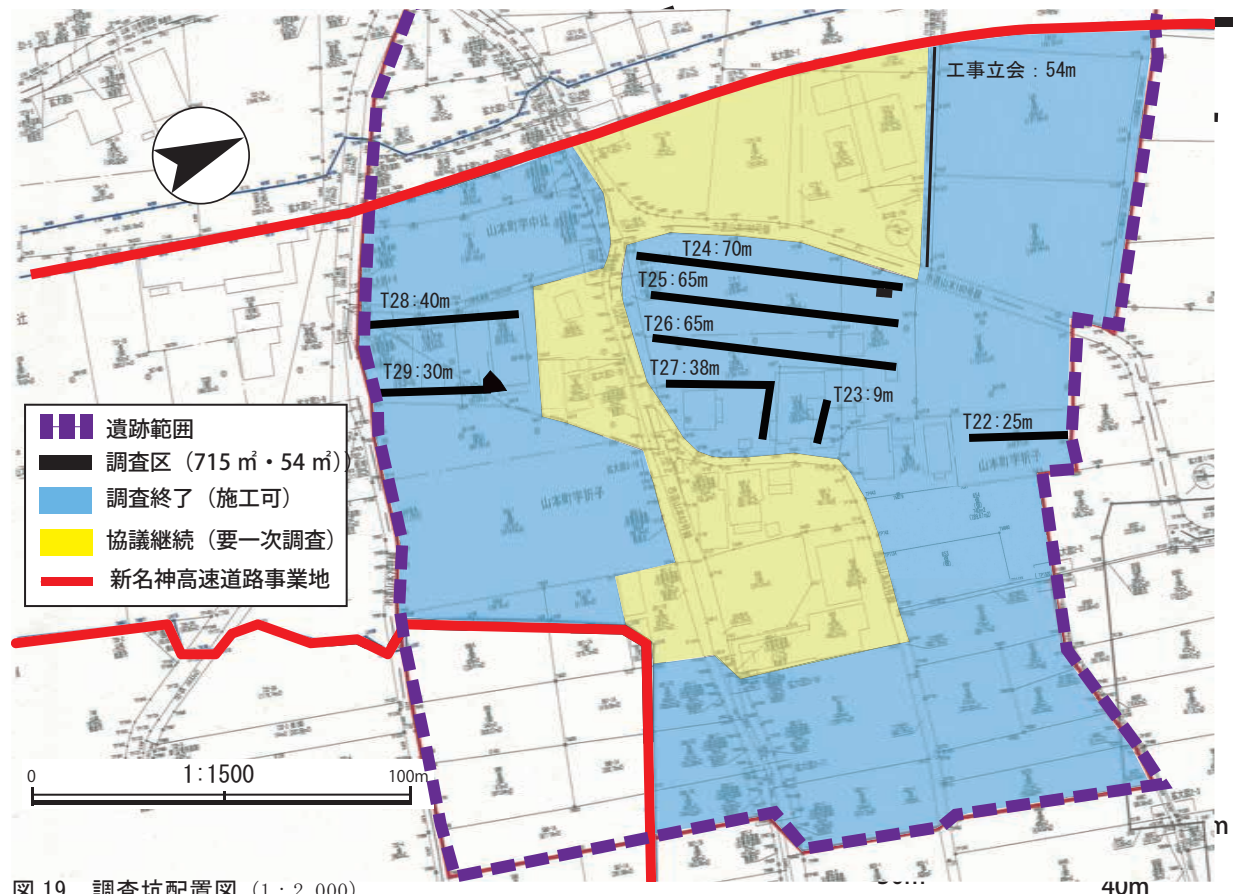


図 19 調査坑配置図（1：2,000）

12 小社遺跡（第3次）

1. はじめに

小社遺跡は鈴鹿市西部、鈴鹿山地の麓に所在し、鍋川北岸の扇状地上に立地する。鍋川の南側には、鎌倉時代を中心とした集落の釜垣内遺跡がある。また、西方には椿大神社がある。周辺には、東荒野遺跡や神戸遺跡、井領田遺跡など中世の遺物散布地が存在する。調査は、平成24・25年度に行われ、2,520㎡が終了した。今年度は、A地区（南区）・B地区（北区）を設けて2,073㎡の調査を行った。

2. 調査の概要と結果

当遺跡は、標高153～155mの北西から南東に向かって傾斜する扇状地に立地し、現況は畑地である。遺構検出面にはぶい黄橙砂質土と褐色土の混在～灰褐粘質土層を主体とする地山であり、遺構検出面までの掘削深度は0.2～0.6mである。

(1) A地区

A地区では、近世以降と考えられる石列や石組みの土坑・溝等を検出し、土坑を6基、溝を3条確認した。土坑のうち小さなものは、長径0.4m、短径0.3mの円形土坑、大きいものは、長径2.3m、短径2.0m規模である。その他、近世の田畑の石垣と思われる石列を伴う溝3条（SD32・37、SZ36）を確認した（写真75）。

3条の溝は、石列が外側に向かって揃えて配置されていることを確認した（写真75）。遺物は、中世後期から近世にかけての土師器片（皿・羽釜・茶釜等）や陶器片（天目茶碗・椀・皿・播鉢等）が多数出土した他、五輪塔（火輪）・石臼を確認したが、建物は確認することが出来なかった。

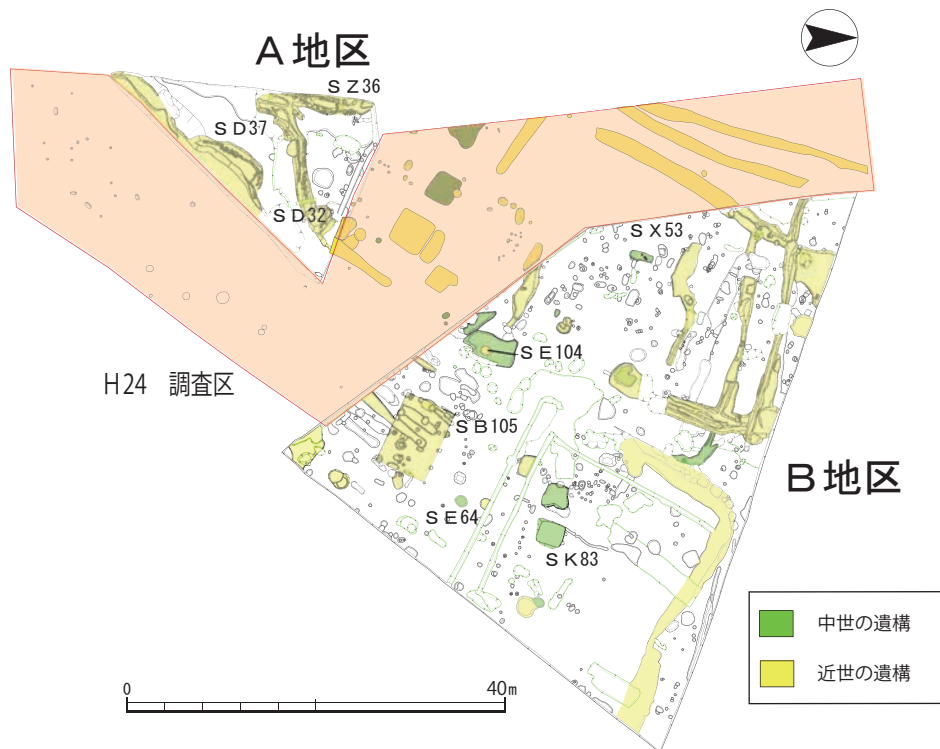


図20 遺構平面図（1：800）

(2) B地区

B地区では、中世後期と考えられる墓1基（S X 53）、井戸1基（S E 64）、近世の井戸（S E 104）、土坑、柱穴等を確認した。遺物は、土師器（皿・羽釜・茶釜・焙烙）、瀬戸美濃産陶器（椀・皿・播鉢）、常滑産陶器（甕・鉢）、青磁椀等の土器等が出土した。検出した土坑は、小さなものは、長辺0.4 m、短辺0.38 mの方形土坑で、大きいものでは、長辺4.0 m、短辺3.6 mで、石列を伴うもの（S K 83）を確認した（写真77）。ここで、特筆すべきは、中世の土壇墓（S X 53）の検出である。この土壇墓は、南北に2.5 m、東西に0.9 mの隅丸方形で、土師器皿・小皿や、天目茶椀片が出土した（写真76）。

掘立柱建物は、側柱建物1棟（S B 105）を確認した。建物の大きさは、東西が4間、南北が2間である。出土した遺物から、近世と思われる。

井戸は、2基確認した。S E 104は、径1.2 mの円

形で、時期としては、出土した遺物から、近世であると思われる。S E 64は、1.4 m×1.2 mの方形で、埋土には礫が大量にみられた。壁面を部分的に補強した礫が崩落したものと、井戸を廃棄する際に埋められたものと考えられる。時期としては、中世の土師器皿・羽釜、常滑産陶器甕等が出土していることから、中世と思われる。

3. まとめ

今回の調査では、中世～近世にかけての遺構・遺物を確認した。具体的には、中世の墓1基、井戸1基、近世と思われる側柱掘立柱建物1棟、井戸1基、石列を確認した。石列の性格としては、段々上の畑の土留めとして利用されていたと考えられる。今回の発掘調査から、この地域では中世からの生活の跡がみられ、近世以降にも生活が引き継がれていたことが確認出来た。



写真73 A地区SD 32（北東から）



写真75 B地区SK 83（西から）



写真74 B地区SX 53（東から）



写真76 調査区全景（東上空から）

報告書抄録

ふりがな	きんきじどうしゃどうなごやこうべせん (よっかいちじゃんくしょんからかめやまにしじゃんくしょん) けんせつじぎょうにともなうまいぞうぶんかざいはつくつちようさがいはう じ							
書名	近畿自動車道名古屋神戸線 (四日市JCT～亀山西JCT) 建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報V							
副書名								
巻次								
シリーズ名	近畿自動車道名古屋神戸線 (四日市JCT～亀山西JCT) 建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
シリーズ番号	V							
編著者名	河尻浩一・服部芳人・松永公喜・浅野隆司・鈴木規之・宮崎久美・水橋公恵・中村法道・水谷豊・山中由紀子・矢田陽・高松雅文・西脇智広・相場さやか・宮原佑治・山田猛							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦2015 (平成27) 年10月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いさかじょうあと 伊坂城跡	よっかいちしいさかちよう 四日市市伊坂町	24202	246	35° 2' 25"	136° 37' 23"	20140519 ～20150313	第6次調査 7,875 (下層319含む)	近畿自動車道 名古屋神戸線 (四日市JCT ～ 亀山西 JCT) 建設事 業
				35° 2' 23"	136° 37' 26"	20140820 ～20150313	第7次調査 2,134 (下層94含む)	
きたやましーいせき 北山C遺跡	くわなししち 桑名市志知	24205 a	154	35° 2' 57"	136° 36' 13"	20140418 ～20140929	第5次調査 9,047	
きたやまえーいせき 北山A遺跡	よっかいちしきたやまちよう 四日市市北山町	24202	239	35° 2' 54"	136° 35' 24"	20140623 ～20140806	第6次調査 756	
なかのやまいせき 中野山遺跡	よっかいちしきたやまちよう 四日市市北山町	24202	238	35° 2' 51"	136° 35' 2"	20140418 ～20141125	第13次調査 6,173	
きたやまじょうあと 北山城跡	よっかいちしきたやまちよう 四日市市北山町	24202	237	35° 2' 50"	136° 34' 53"	20140418 ～20141218	第4次調査 6,948	
いばやしせき 居林遺跡		24202	584					
こまきみなみいせき 小牧南遺跡	よっかいちしこまきちよう 四日市市小牧町	24202	568	35° 2' 33"	136° 34' 2"	20141208 ～20141209	一次調査 165	
むくのきいせき 棕ノ木遺跡	こものちよういげぞこ 菰野町池底	24341	135	35° 1' 53"	136° 31' 9"	20140618 ～20140619	一次調査 174	
				35° 1' 51"	136° 31' 7"	20150310 ～20150311	一次調査 186	
たかのせいせき 高ノ瀬遺跡	すずかしやまもとちよう 鈴鹿市山本町	24207	1342	34° 57' 41"	136° 27' 47"	20140409	一次調査 54	
				34° 57' 41"	136° 27' 47"	20141014 ～20141024	一次調査 715	
こやしろいせき 小社遺跡	すずかしこやしろちよう 鈴鹿市小社町	24207	1153	34° 57' 7"	136° 27' 20"	～20140418 20140812	第3次調査 2,073	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伊坂城跡	城館跡	中世	城門（櫓門）・掘立柱建物・礎石建物・石つぶて遺構・井戸・土坑・溝等	土師器（皿・羽釜・茶釜）、陶器（天目茶碗・播鉢）、中国（明）の染付皿、金属製品（火縄銃の弾・古銭・釘等）、貝殻等	
			掘立柱建物・犬走り状遺構・火葬土坑・土坑・溝等	土師器（皿・羽釜等）、陶器（天目茶碗・播鉢等）等	
北山C遺跡	散布地	古墳・弥生	古墳・土壙墓	須恵器（甕・甕・高杯・杯蓋等）、土師器（甕・高杯）、鉄製品（刀子・鎌等）、石製品（勾玉・砥石等）、埴輪（円筒形、家形）	
北山A遺跡	集落跡	弥生・古墳・飛鳥・奈良	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・ピット	土師器、須恵器、石器	
中野山遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・飛鳥・奈良	縄文時代後期：土坑（袋状土坑など） 古墳時代後期から飛鳥時代：竪穴住居・掘立柱建物・土坑（大型土坑など） 中世：墓	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器	
北山城跡 居林遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	竪穴住居・掘立柱建物・土坑・溝・ピット	弥生土器、土師器、須恵器、石器	
小牧南遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・飛鳥・中世	なし	なし	
棕ノ木遺跡	散布地	古代・中世	溝（落ち込み？）・攪乱	須恵器片、山茶碗片、近現代陶器	
			なし	なし	
			竪穴住居・土坑・溝	弥生土器、土師器、須恵器	
高ノ瀬遺跡	包蔵地	鎌倉	なし	灰釉陶器片、土師器片	
小社遺跡	包蔵地	中世・近世	墓・井戸・土坑・溝・柱穴	土師器、陶磁器、石製品	

要 約	<p>【伊坂城跡】 朝日丘陵の端部に位置する戦国時代の城館跡である。第6次調査は、本丸に相当する曲輪1の北半分、二の丸に相当する曲輪2のほぼ全面を中心に調査を行った。調査の結果、曲輪1において礎石を有する櫓門1棟、掘立柱建物4棟以上、井戸1基、曲輪3において石つぶで遺構1基、曲輪2において門1基、カマドの可能性を持つ土坑1基などを確認した。曲輪1、曲輪2の北側は斜面を急峻に削ることで守りを固めており、斜面の下端には平坦面が認められた。この平坦面（曲輪11～16）から麓へ斜面が続くが、この斜面については自然地形と判断出来た。また、曲輪6、8、9の西端では自然地形の谷が南北方向に伸びていた。これらから第6次調査区の北側、西側には遺跡範囲が広がらないことが判明した。なお、東側に隣接して第7次調査を実施した。出土した土器から、伊坂城は15世紀末～16世紀後半に築城され、16世紀後半まで城として機能していたと考えられる。</p>
	<p>【伊坂城跡】 第7次調査は、今年度調査を行った第6次調査の東側に位置し、第6次調査とは堀切により隔てられている。調査の結果、西区では第6次調査に隣接する平坦地において、掘立柱建物3棟・土坑・溝・柱穴を検出した。平坦地の北側には犬走り状の平坦地があり、第6次調査と第7次調査下段の平坦地をつなぐ通路として利用されたと考えられる。また西区中央部では土壇状の高まりがあり、盛土により造成されていることが確認された。中区では、火葬土坑と考えられる壁面が被熱により硬化・赤変し、多量の炭化材を含む土坑を2基検出した。うち1基からは骨片が出土している。また、中央部には溝で囲まれた土壇状の高まりが確認されたが性格は不明である。西区・中区の斜面部および東区では部分的に平坦地を確認したものの明確な遺構は確認できなかった。</p>
	<p>【北山C遺跡】 桑名市南部を流れる員弁川の南岸、四日市市にかけて広がる丘陵上に位置する。今回の調査区は、平成25年度の第4次調査区の北端、東端と隣接する。調査の結果、新たに21基の方墳と1基の円墳を確認した。墳丘は削平され、大半の古墳は周溝を残すのみであったが、1基で主体部が残存しているのを確認し、そこから刀子が出土した。他の古墳においても周溝埋土から5世紀代の須恵器と土師器、また1基から埴輪が出土した。また、古墳時代の土壇墓が16基確認され、鉄製品および砥石、勾玉が出土した。</p>
	<p>【北山A遺跡】 員弁川と朝明川に挟まれた丘陵上に立地している。今回の第6次調査では、土坑、ピットなどとともに、飛鳥時代から奈良時代にかけての堅穴住居2棟、掘立柱建物1棟が確認された。昨年度までに行われた第2次・第3次・第5次調査の結果と合わせると、北山A遺跡に営まれた飛鳥時代から奈良時代にかけての集落には、掘立柱建物が集中して建てられた地区があることが明らかになった。また中野山遺跡の調査結果とも合わせると、この集落は、中野山遺跡の東部の集落と一連であると考えられる。</p>
	<p>【中野山遺跡】 第13次発掘調査では、縄文時代の土坑6基、古墳時代後期から飛鳥時代の堅穴住居15棟・掘立柱建物16棟・大型土坑7基、中世の墓などを確認した。遺構は、調査区東部に集中している。西部には見られないことから、中野山遺跡における集落の西端部と考えられる。縄文時代の袋状土坑を1基確認した。隣接する第9次・第12次調査区でも計6基確認しているが、類例の少ない遺構である。中から後期初頭の土器が出土した。弥生時代の堅穴住居などは見られないものの、ピットから弥生土器片が数点出土した。古墳時代後期から飛鳥時代の堅穴住居や掘立柱建物の中には、方向を同じにし近接するものが数棟見られた。出土した須恵器や土師器からも同時代の遺構と考えられ、計画的に建てられたことが想定される。</p>
	<p>【北山城跡・居林遺跡】 員弁川と朝明川に挟まれた丘陵の西側端部に位置している。今回の4次調査は丘陵上の平坦部を中心に、北側に位置する谷裾にかけて調査を行った。調査の結果、丘陵上の平坦部から弥生時代後期から古墳時代前期堅穴住居73棟、掘立柱建物2棟が確認された。その他にも、平安時代の土坑も確認したが、中世の城館に関わる遺構は確認できなかった。</p>
	<p>【小牧南遺跡】 3箇所調査坑を設定したが、いずれの調査坑においても遺構・遺物ともに確認されなかった。（一次調査・165㎡）</p>
	<p>【棕ノ木遺跡】 調査坑を4本（T1～T4：延長87m）設定して遺構・遺物の有無についての調査を行った。遺物は、T2から須恵器片・山茶碗片が1点出土したが、大半は近現代の陶器片である。また、いずれの調査坑でも、攪乱と近現代の溝（落ち込み？）を確認したにとどまり、明確な遺構は確認されなかった。（一次調査・174㎡）</p>
	<p>【棕ノ木遺跡】 調査坑を4本（T5～T8）設定して遺構・遺物の有無について調査を行った。結果、T5・T6では造成土が広範囲に入っているのを確認し、T7・T8では近現代の耕作に伴うと思われる溝及び地表構造物の埋設物に伴う攪乱を認めた。いずれの調査坑でも遺構・遺物は確認されなかった。（一次調査・186㎡）</p>
	<p>【棕ノ木遺跡】 調査の結果、7世紀中頃の堅穴住居5棟と土坑1基、江戸時代以降の溝を複数検出した。堅穴住居はいずれもカマドを持つ。堅穴住居からは、須恵器の甕や杯、土師器の甕や甑等が出土した。また、堅穴住居埋土から弥生土器が出土した。このことから下層遺構存在の可能性が考えられたため下層調査を行ったが、遺構や遺物の確認はなかった。</p>
	<p>【高ノ瀬遺跡】 新名神高速道路建設に伴う集落排水管移設工事が行われるにあたって工事立会を行った。総延長54m、幅1mの範囲を調査したが、遺構、遺物ともに確認されなかった。（一次調査・54㎡）</p>
	<p>【高ノ瀬遺跡】 調査坑を8本（T22～T29）設定し行ったが、安定した遺構検出面は確認されず、遺構も検出されなかった。遺物は、小片が少量出土したが、いずれも攪乱穴からである。（一次調査・715㎡）</p>
	<p>【小社遺跡】 鍋川北岸に位置する。現況は標高153～155mの北西から南東に向かって傾斜する扇状地に立地し、現況は畑地である。調査の結果、A地区では近世以降と考えられる石列や石組の土坑・溝等が、B地区では中世後期の遺構と考えられる墓1基・井戸1基・土坑、近世と考えられる掘立柱建物1棟・溝・土坑・柱穴等を確認した。出土遺物は土師器（皿・羽釜・茶釜・焙烙）、瀬戸美濃産陶器（椀・皿・挿鉢）、常滑産陶器（甕・鉢）、青磁等の土器の他、五輪塔（火輪）・石臼等が出土している。</p>

近畿自動車道名古屋神戸線
(四日市 JCT～亀山西 JCT) 建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ

2015 (平成27) 年10月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 株式会社ミフジ印刷